



東洋大学

平成 30 年度 東洋大学 IR シンポジウム

学生の自律的な学修時間をどう増やすか

報告書

<開催概要>

日時:平成 30 年 12 月 15 日(土) 13:30~17:00

場所:東洋大学白山キャンパス 8B11 教室(8 号館地下 1 階)

<目次>

開会のご挨拶 竹村 牧男 東洋大学 学長 IR室長

[講演 1] 大学生の学修時間—全国大学生調査の結果から1

濱中 義隆 氏 国立教育政策研究所 高等教育研究部副部長・総括研究官

[講演 2] 東洋大学の学生の学修時間19

「新入生アンケート」「在校生アンケート」「卒業時アンケート」による検証

劉 文君 東洋大学 IR 室 教授

[特別講演] 学生の自律的な学修時間をどう増やすか31

金子 元久 氏 筑波大学 大学研究センター 特命教授

[パネルディスカッション]

学修時間の増加に向けた本学の取り組み～パネルディスカッションに先立ち～47

副学長(教務部長・就職キャリア推進委員長・教職センター長) 高橋豊美 教授

※附:「在校生アンケート」からみた東洋大学学生の勉強時間(学部、学年別) 49

講師紹介



金子 元久 氏 筑波大学 大学研究センター 特命教授、東京大学 名誉教授

東京大学教授、同大学院教育学研究科長・教育学部長、国立大学財務経営センター研究部長などを歴任。中央教育審議会委員、日本学術会議会員、日本高等教育学会長などを歴任。主な著書:『大学の教育力:何を教え、学ぶか』筑摩書房(2007 年)、『大学教育の再構築:学生を成長させる大学へ』、玉川大学出版部(2013 年)等。



濱中 義隆 氏 国立教育政策研究所 高等教育研究部 総括研究官・副部長

大学評価・学位授与機構学位審査研究部助教授、開発部准教授などを経て、現職。主な著書:『高専教育の発見-学歴社会から学習歴社会へ』岩波書店(共編著、2018 年)、『大衆化する大学-学生の多様化をどうみるか』岩波書店(共著、2013 年)、『大卒就職の社会学-データからみる変化』東京大学出版会(共著、2010 年)ほか。



劉 文君 東洋大学 IR 室 教授

東京大学大学総合教育研究センター特任研究員、同大学政策ビジョン研究センターシニア研究員などを歴任。主な著作:『中国の職業教育拡大政策—背景・実現過程・帰結』東信堂学術出版社(2004 年)、『学生からみた東京大学—3 つの東大生調査から』東京大学大学総合教育研究センター(共著、2012 年)等。

<ご挨拶>

東洋大学 IR 室長
竹村 牧男

本日は、東洋大学にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。
学外から数多くの方々にご参加いただき、学外から 80 名を超えるご参加と伺っております。
心より感謝申し上げます。

特に講師を務めていただきます、筑波大学の金子元久先生、国立教育政策研究所の濱中義隆先生には、大変ご多用の中、本シンポジウムのご準備と本日の講演にお時間を割いてくださり、感謝に堪えません。ありがとうございます。

さて、本シンポジウムでは、「学生の自律的な学修時間をどう増やすか」というテーマで、御二方のご講演をいただくとともに、本学 IR 室からの報告・パネルディスカッションをしまして、質を伴った学修時間の確保についてももう一度考える機会にいただければと考えております。ご講演いただく御二方の講演テーマも大変興味深いものとなっており、学内のみの議論に留まることのない多角的な視点で教育効果について考えることができると期待しております。

本学では、平成 25 年度に IR 室を開設し、昨平成 29 年度には高等教育推進センターを立ち上げ、データの収集と発信、さらには自己点検評価への活用という流れを作りつつありますが、まだまだ、充実させていかなければならないと考えております。

これまで東洋大学では、学修時間の把握や学生の主体的な学びの機会を増やすなどの取り組みを進め、教育の質的転換に資するよう、学修時間の実質的な増加・確保を図ってきました。本日は、果たして本当に学修時間の重要性は認識され、学修時間は増えたのか。どのような教育的な効果が見られたのか。教育改革の原点でもあった学修時間に再度焦点を当てる機会に繋げていただきたいと思いますと考えております。

本日のプログラムが有益な意見交換の機会となるよう、工夫したプログラムとなっておりますので、どうぞ皆様、本日はこのシンポジウムが大変実りあるものとなることをお祈りしまして、はなはだ簡単ではありますが、開会の挨拶とさせていただきます。

大学生の学修時間

- 全国大学生調査の結果から -

平成30年度東洋大学IRシンポジウム

2018年12月15日

国立教育政策研究所 高等教育研究部

副部長・総括研究官 濱中義隆

1

学生の「学習時間」への着目

- 「我が国の高等教育の将来像(答申)」(2005年)
 - “単位制度の趣旨に沿った十分な学習量の確保”
- 「学士課程教育の構築に向けて(答申)」(2010年)
 - “教育の質の維持、国際的な通用性の観点から(単位制度の実質化が)不可欠”
 - “シラバス、セメスタ制、キャップ制、GPAなど諸手法との相互連携の必要性が認識されていない可能性”
 - 当時は、15週の授業時間の確保だけが話題に??

2



学生の「学習時間」への着目

- 中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(2014年)
 - 今後の大学教育の質的転換に向けて、学生の主体的な学修の時間を確保・増大することが不可欠と提言
- なぜ主体的な「学習時間」なのか？
 - 大卒者に求められる能力
 - 幅広い教養、課題発見・解決力、自らの意思や考えを論理的に発信する能力
 - 大学で「何を学んだか」だけでなく、「どう学んだか」も重要
 - 学生の能動的学習時間の量
 - 単に法令上の「単位」の実質化を求めているのではない
 - 大学が提供している学習経験の質(タイプ)を示す指標
- これらを受けて、学生の学習時間・学習経験は変化したのか？→本日の報告

3



「大学生の学習状況に関する調査」

- 目的
 - 適切な統計的手続き(標本抽出)に基づく大規模調査により、大学生の学習実態を正確に把握
 - 主体的な学習を促進・阻害する要因の把握
 - 学習経験と学修成果(アウトカム)の関連の把握
- 2014年度より日本学生支援機構の「学生生活調査」と共同で調査を実施
 - 本日は主として2016年度調査の結果を使用(n=18816)
 - 「学生生活調査」は2006年度から生活時間を把握
- 現在、2018年度調査を実施中
 - 調査へのご協力に感謝いたします

4

報告の具体的内容

- ① 学生の学習時間・生活時間の現状
 - － 諸外国の学生調査との比較
- ② 学生の学習時間・学習経験は変化したか
 - － 学生生活調査にみる学習時間の変化
 - － 授業での経験や学習に対する意識の変化（東大CRUMP調査2007との比較）
- ③ 自主的な学習を阻害・促進する要因

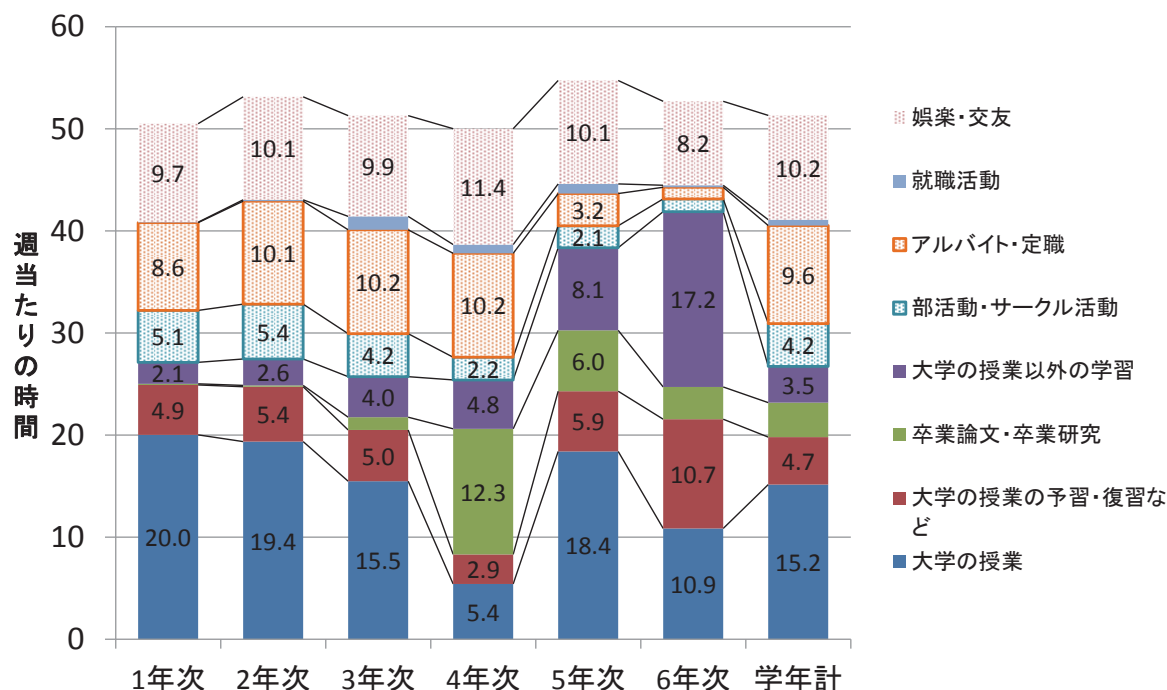
5

分析課題①

学生の学習時間・生活時間の現状 - 日本の大学生の特徴-

6

大学生の平均生活時間(日本)

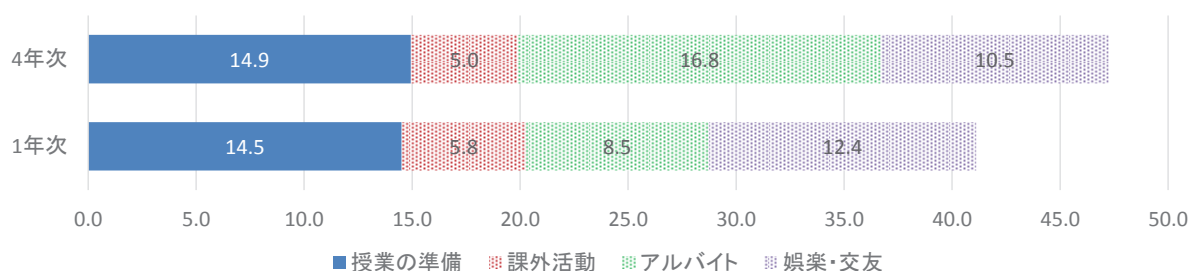


- ・授業の予習・復習の時間は、授業出席時間の1/4程度

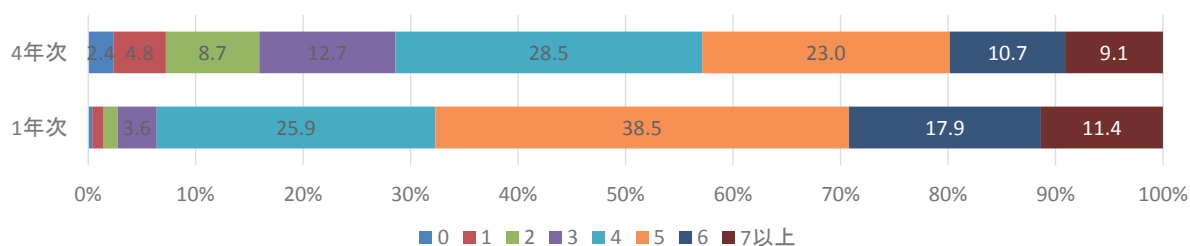
7

大学生の平均生活時間(アメリカ)

1週間あたりの平均時間



今学期の履修科目(Class)数



- ・授業の準備は日本の約3倍。授業への出席時間は15時間前後か？

出典：NSSE Summary Tables 2018

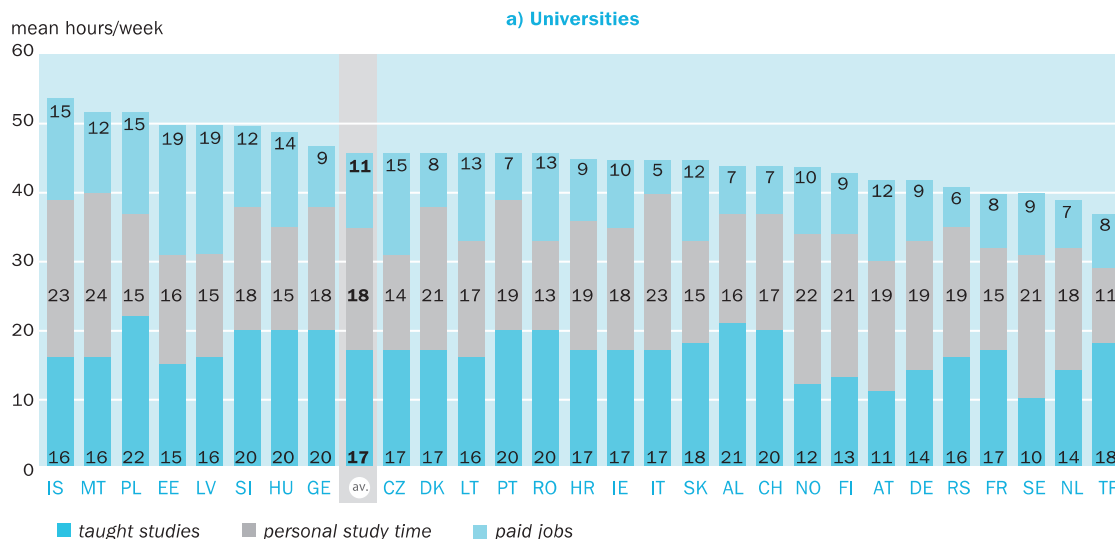
8

大学生の平均生活時間(EU)

Figure B5.4 ↓

Students' time budget by type of HEI

Students' time budget by type of activity (in mean hours/week)



・授業出席時間、自学自習の時間ともに15～20時間程度。バイトは10時間前後

出典：EUROSTUDENT(2018) p.119

9

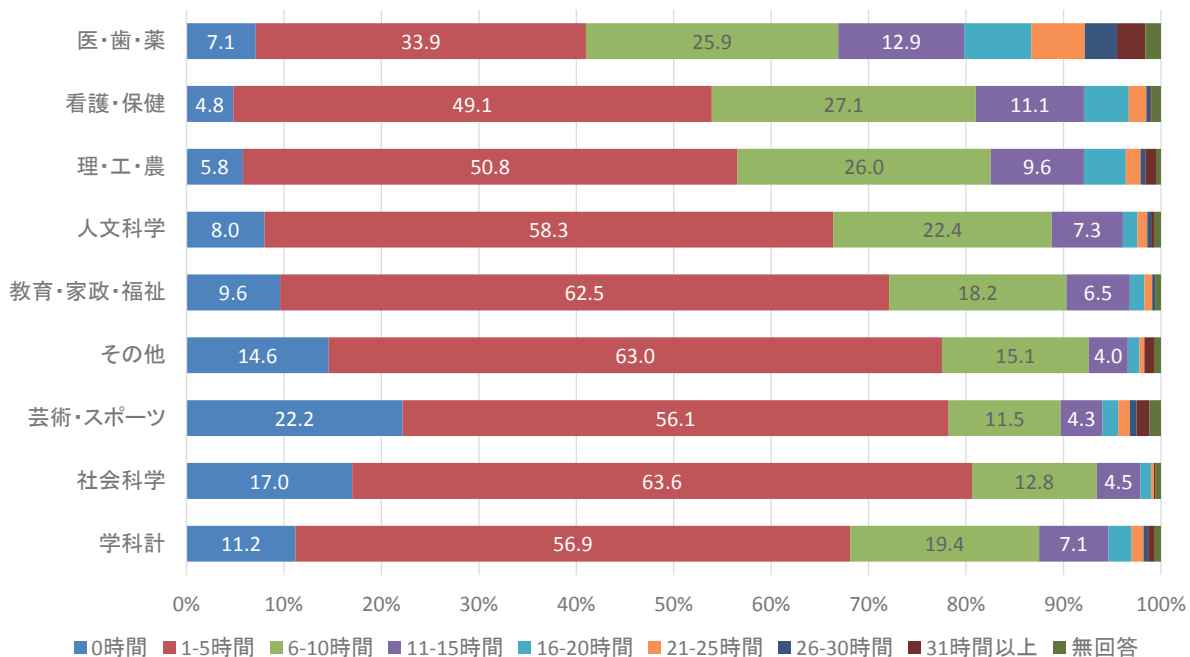
生活時間の国際比較

- ・調査方法が異なるので単純な比較はできないけれども・・・
- ・日本の学生の自学自習の時間が少ないことは明らか(「授業の予習・復習」と「大学以外の学習」を合わせて約7時間)
 - － 授業への出席時間は同程度かやや日本の方が長い(特に1・2年生)
 - － 学年間の差が大きいのも日本の特徴といえるか
 - － アルバイトや課外活動の時間はあまり差はないとみてよさそう

10

専攻分野による学習時間の違い

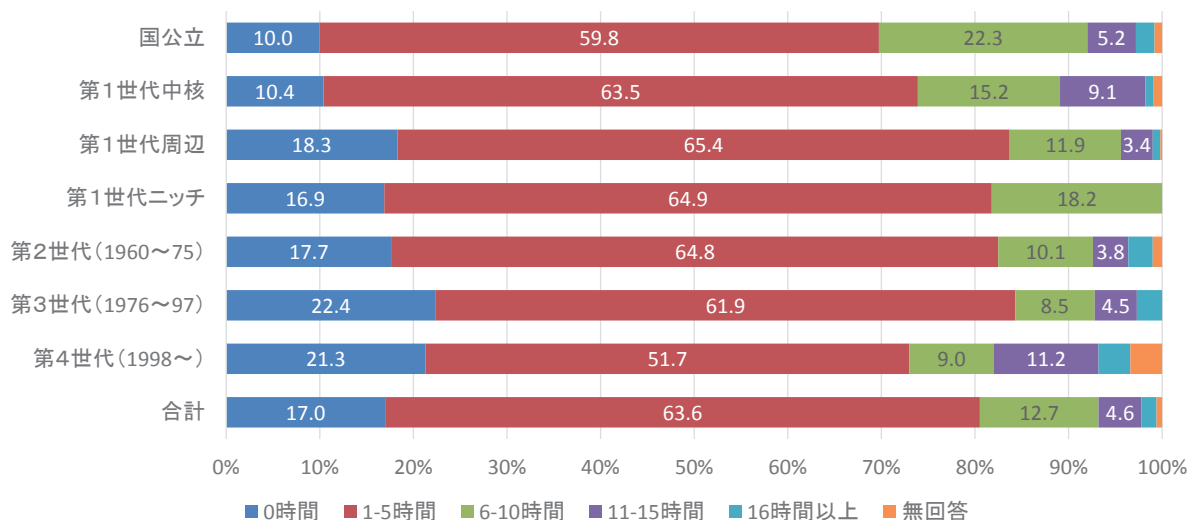
専攻分野別 授業の予習・復習の時間(2016年度、1・2年生)



11

大学属性による学習時間の違い

大学類型別 授業の予習・復習の時間(1・2年生、社会科学系のみ)



- 大学の選抜性(入学難易度)とある程度相関するが、大学属性による差はさほど大きくない

12

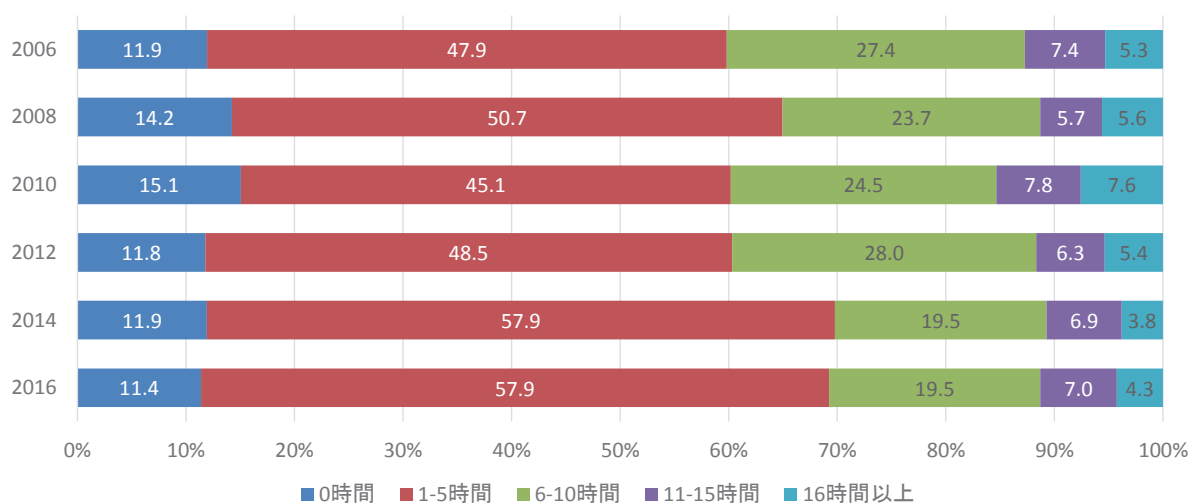
分析課題②

学生の学習時間・学習経験は変化したか

13

授業の予習・復習時間の変化

1週間あたりの授業の予習・復習の時間(1・2年生、学生生活調査)

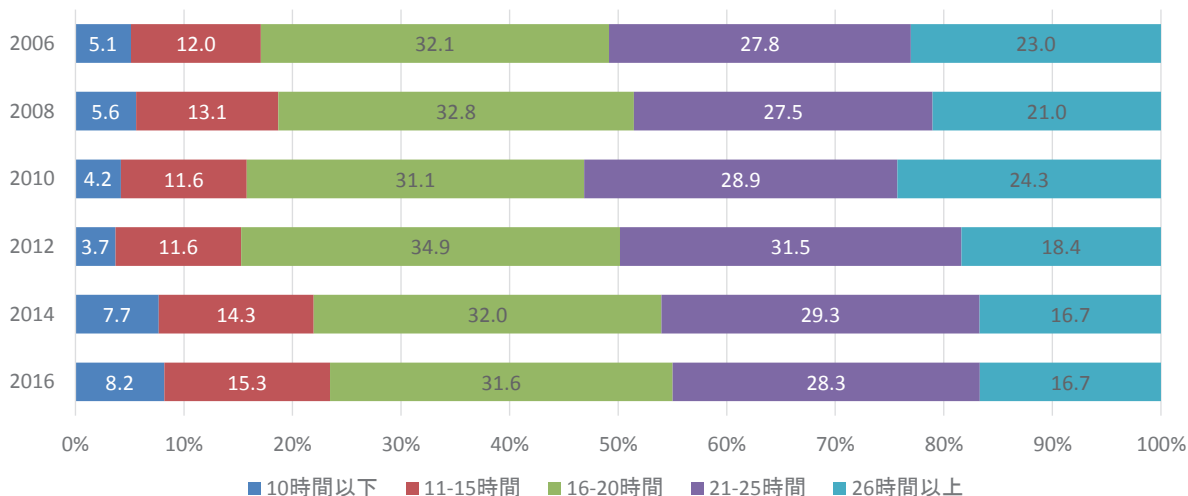


- ・2012→2014年度の変化は、質問方式の変更による可能性が高い
- ・2007年東大CRUMP調査とはほとんど変化なし(11.3, 58.1, 17.8, 6.9, 5.9)

14

授業への出席時間の変化

1週間あたりの授業への出席時間(1・2年生、学生生活調査)

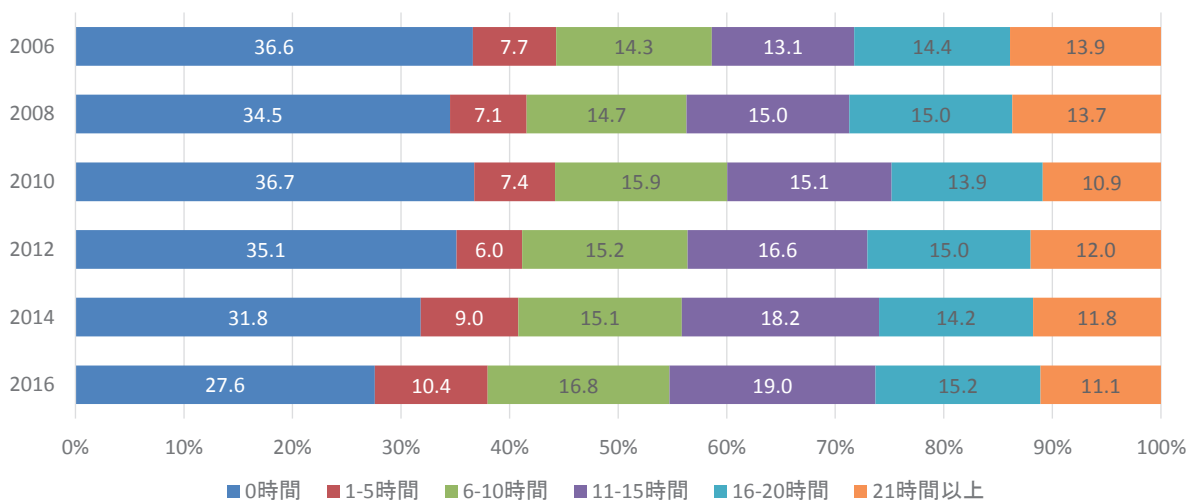


- ・2012→2014年度の変化は、質問方式の変更による可能性が高い
- ・2010年度のみやや出席時間が長い(前頁の自習時間も同様)
→就職難の影響か？

15

アルバイト時間の変化

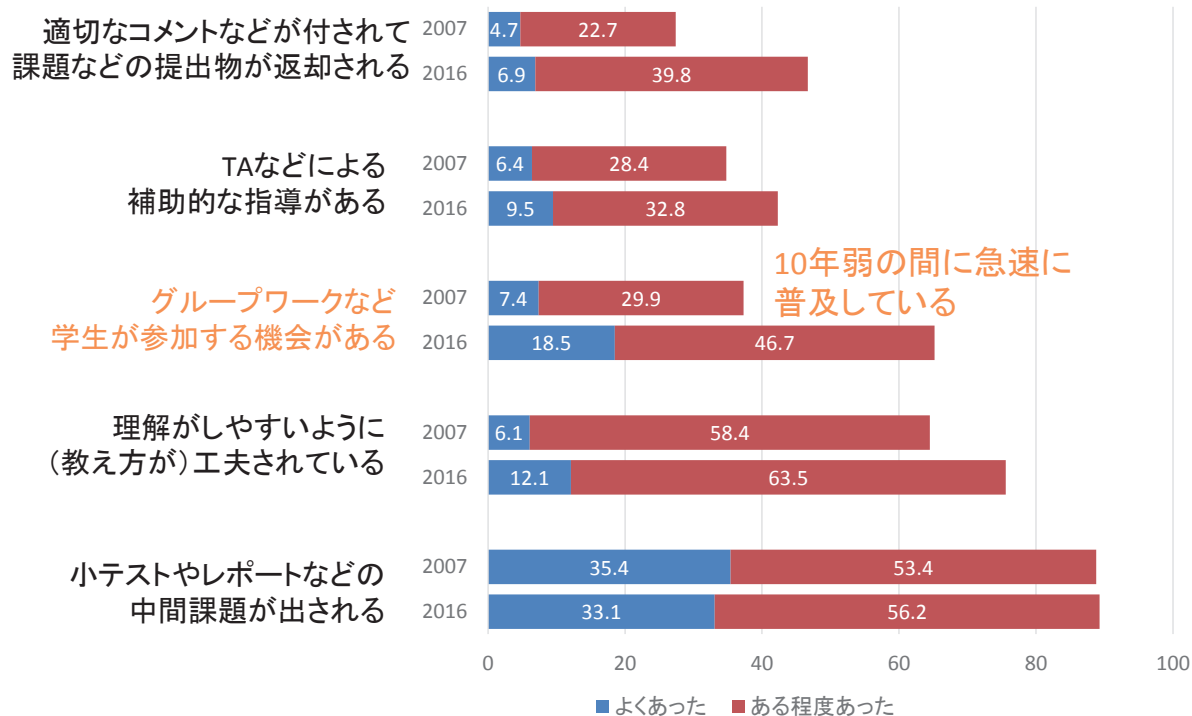
1週間あたりのアルバイト時間(1～4年生、学生生活調査)



- ・質問方式の変更(2014年)以降も「0時間」が減少。ただし長時間のアルバイトに従事する学生が増加しているわけではない
- ・アルバイトの増加にも求人状況の影響か(不況期の2010年はやや少ない)

16

授業での学習経験の変化

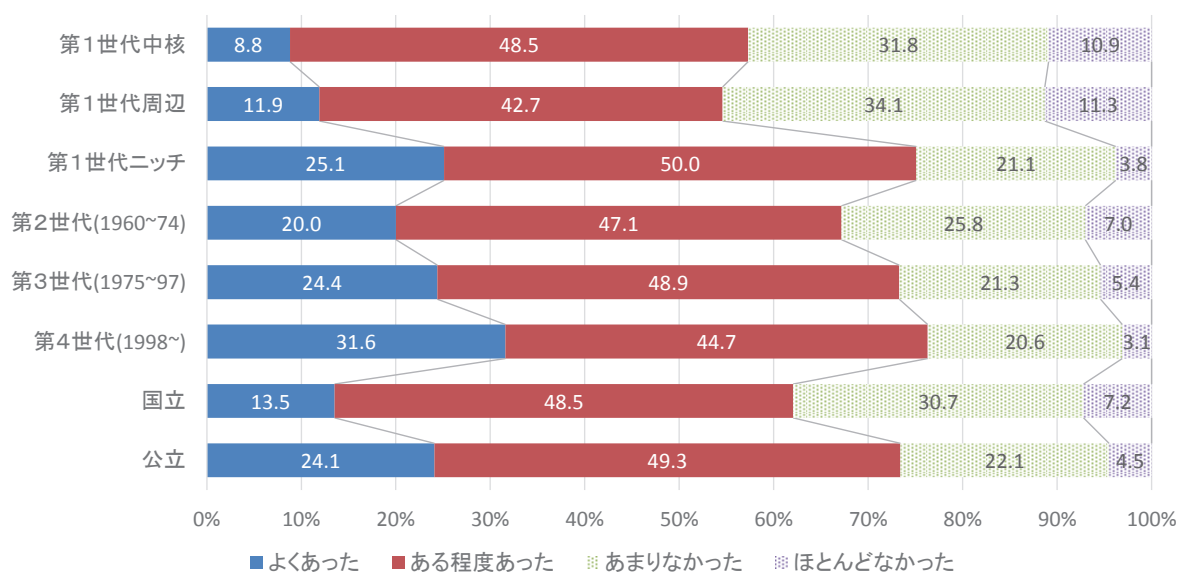


※ 2007年は東大CRUMP調査の結果

17

大学属性による学習経験の違い

「グループワークなど学生が参加する機会がある」(2016年度)

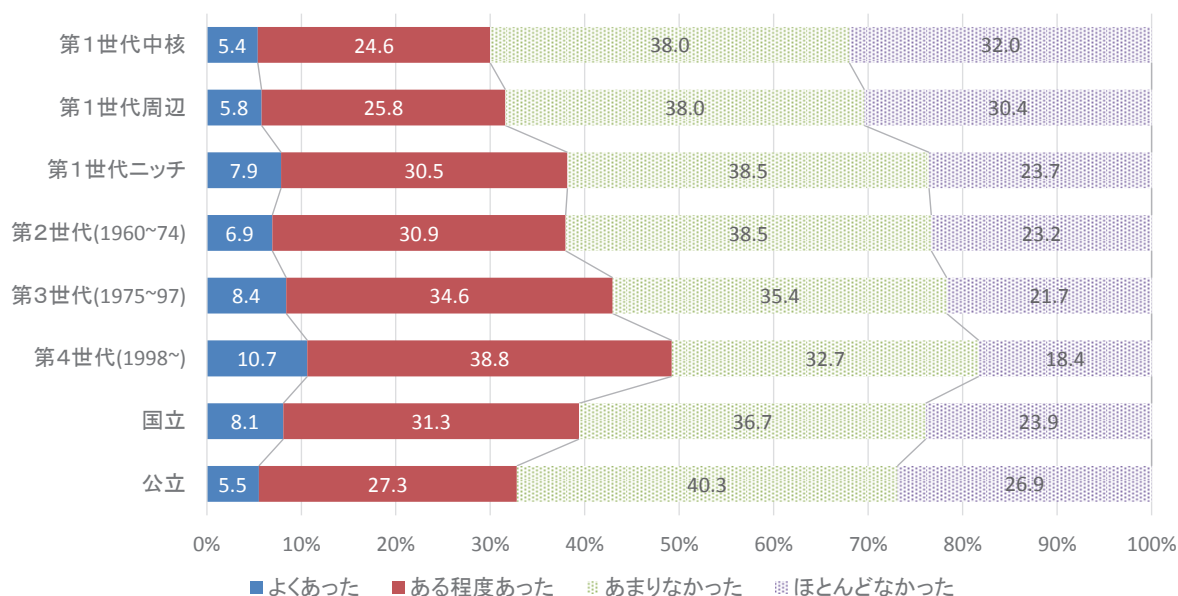


- 新設私大の方が、いわゆるアクティブラーニングの機会が多い
→大学の規模(学生数)との関係

18

大学属性による学習経験の違い

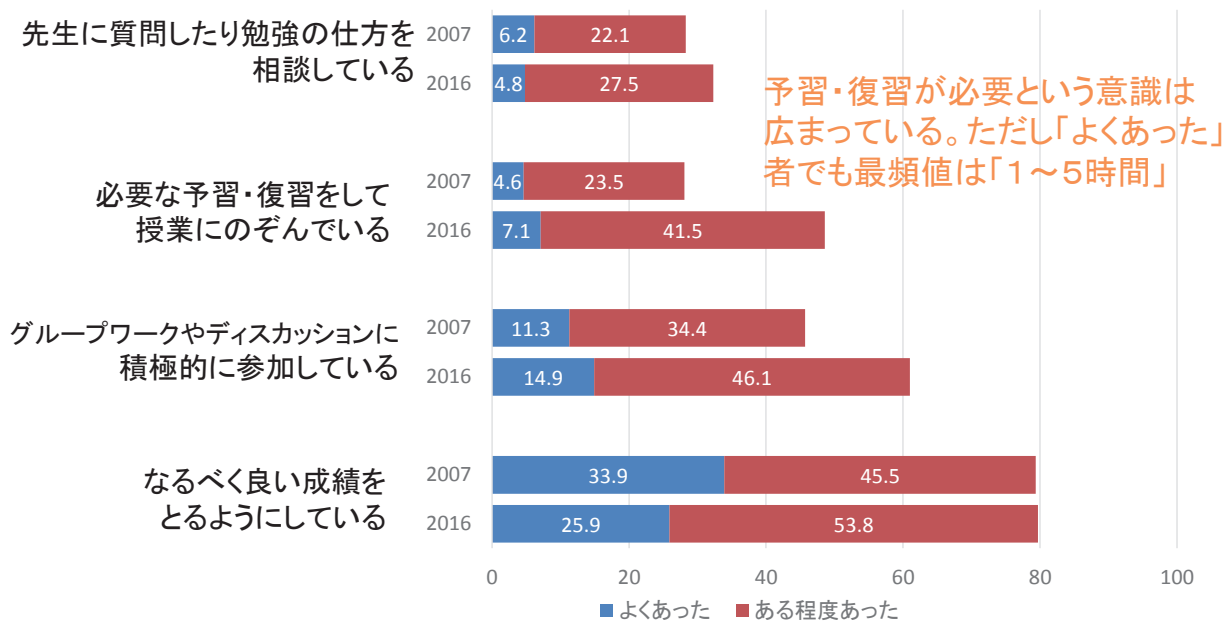
「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」(2016年度)



- 大規模校(第一世代中核、周辺)でやや少ない

19

学生の学習に対する意識の変化



※ 2007年は東大CRUMP調査の結果

20

学習時間・学習経験の変化

- 調査結果を見るかぎり、学生の学習時間は過去10年間でほとんど変化なし
- 一方で、授業改善はある程度進展
 - アクティブラーニング（参加型授業）の増加
- 学生の学習に対する意識にも変化
 - 予習・復習の必要性は伝わっているが学習時間の増加には結びついていない
 - そもそも教員の側がの準備学習に対する要求水準が低い？
 - 日本「1時間」が最多（40%強） 米国「6時間」が最多（20%）、3割は「7時間以上」（小方 2018）
 - 「小テストや中間レポートが課される」は9割の学生が「よくあった」「ある程度あった」と回答

21

分析課題③

自主的な学習を阻害・促進する要因

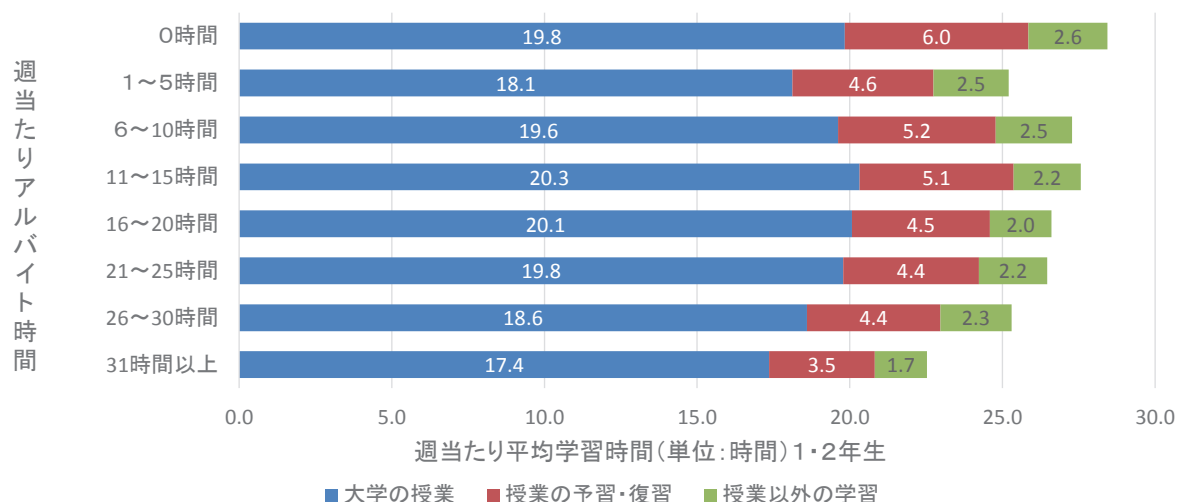
22

学習時間の増加を阻む要因(1)

・アルバイト

－ アルバイト時間が長いほど平均学習時間は短い傾向

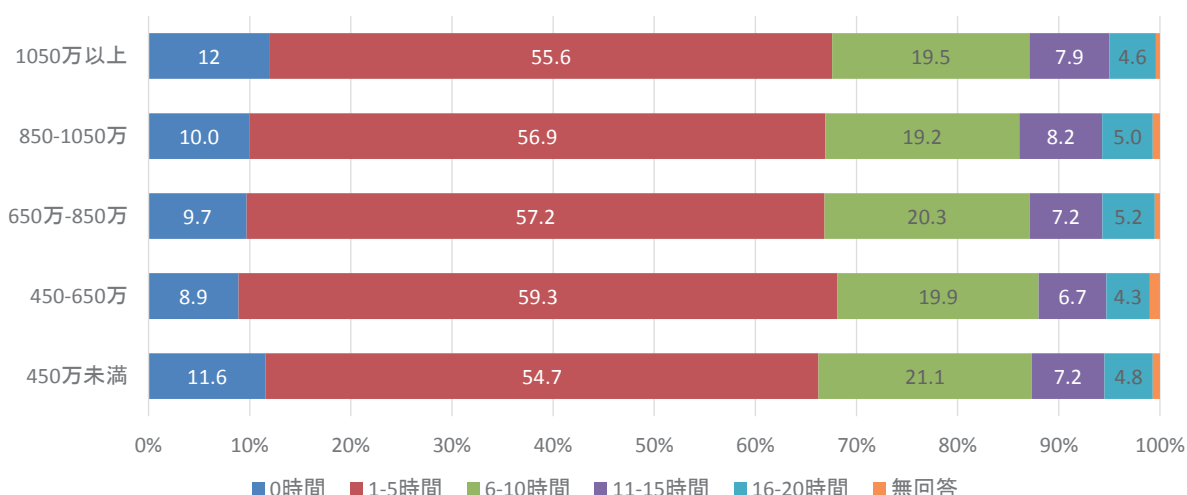
- ・ 週に16時間以上のアルバイトは予習・復習の時間に影響
- ・ ただし、それほど大きな差があるといえるかは微妙



23

学習時間の増加を阻む要因(1)

学生の家計所得と授業の予習・復習時間の関係(1・2年生、2016年度)

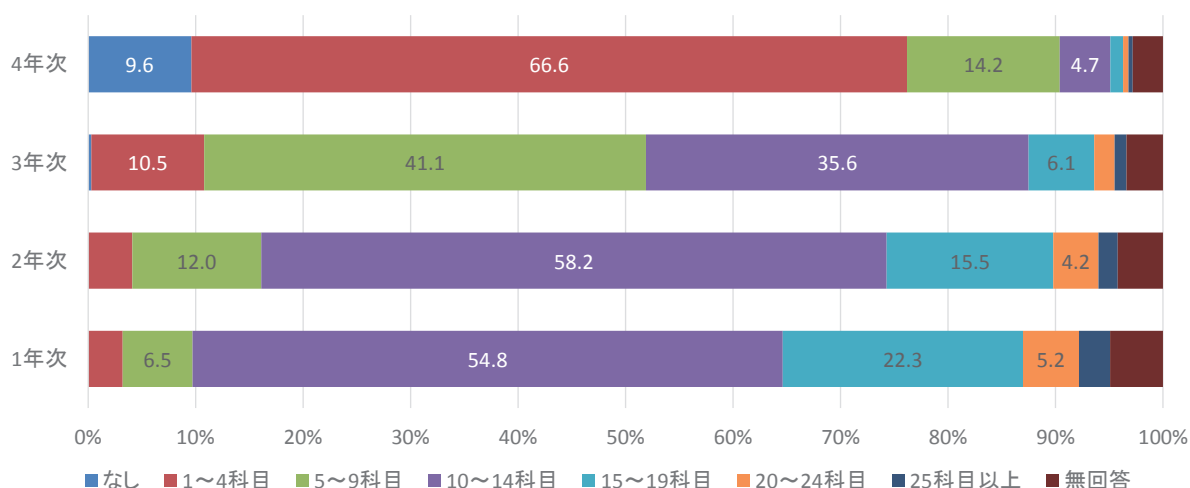


- ・ 「経済的理由による過剰なアルバイト→学習時間の阻害」という仮説はマクロに見れば当てはまらない
 - － そうした学生が現に存在することを否定するものではないが

24

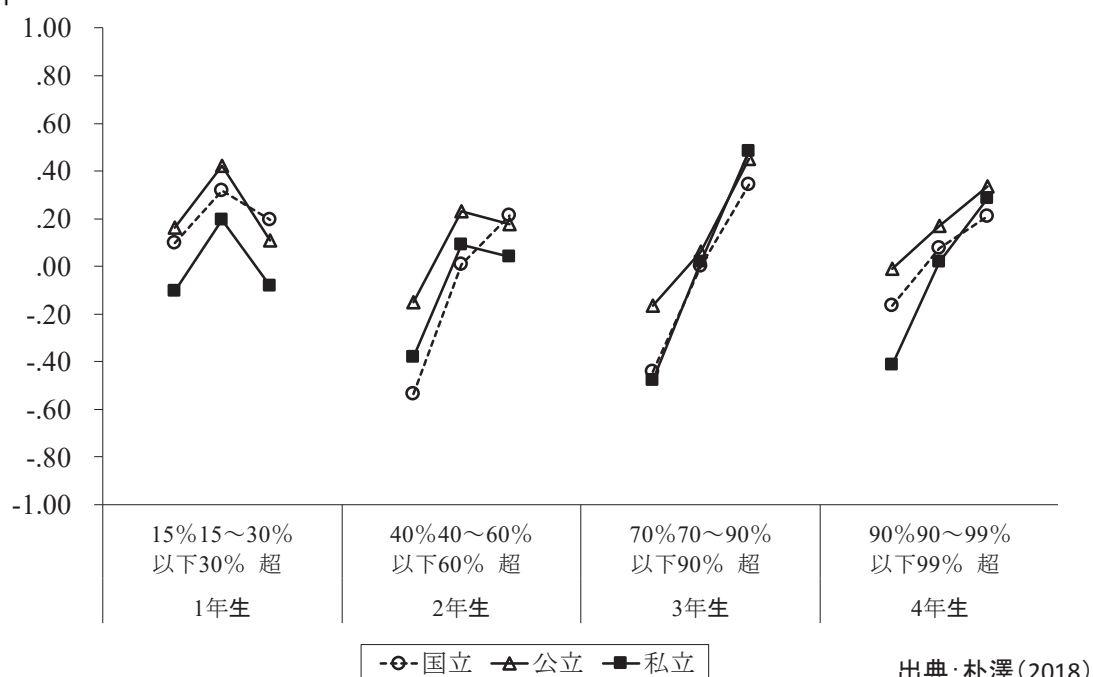
学習時間の増加を阻む要因(2)

- 授業出席時間(履修科目数)の多さ
 - 1～2年生では平均13～14科目登録(1コマ1.5時間とすると、週当たりの授業出席時間は約20時間となって平均と一致→授業への出席率が高い)
 - 1セメスタ当たり20単位以上修得→3年生で卒業要件を満たす



25

単位の修得状況と学業成績の関係

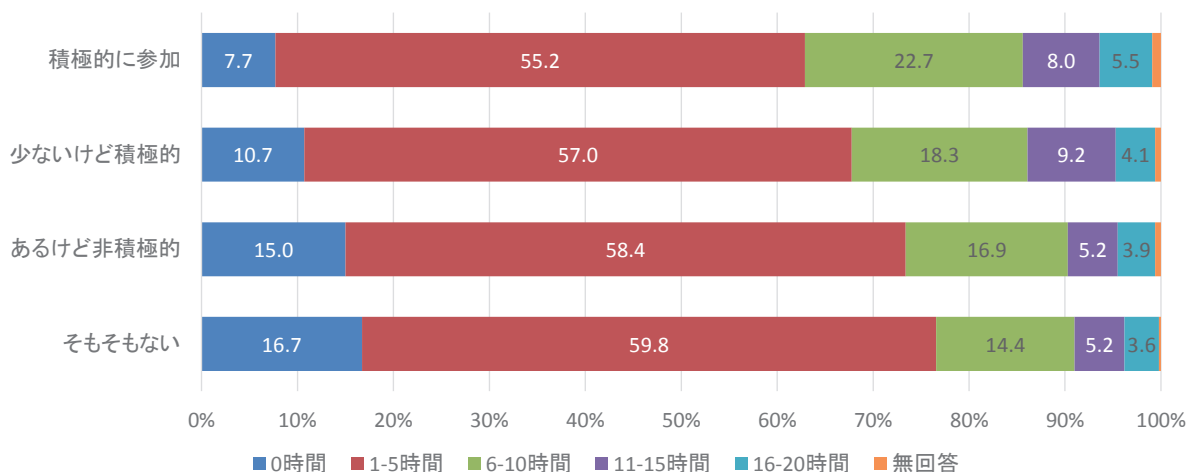


- 1年生では、単位の過剰修得は成績を下げる
 - 成績は悪くても卒業に必要な単位を早く取ろうとする

26

学習時間を増加させる要因(1)

グループワーク等への参加と授業の予習・復習時間(1・2年生)

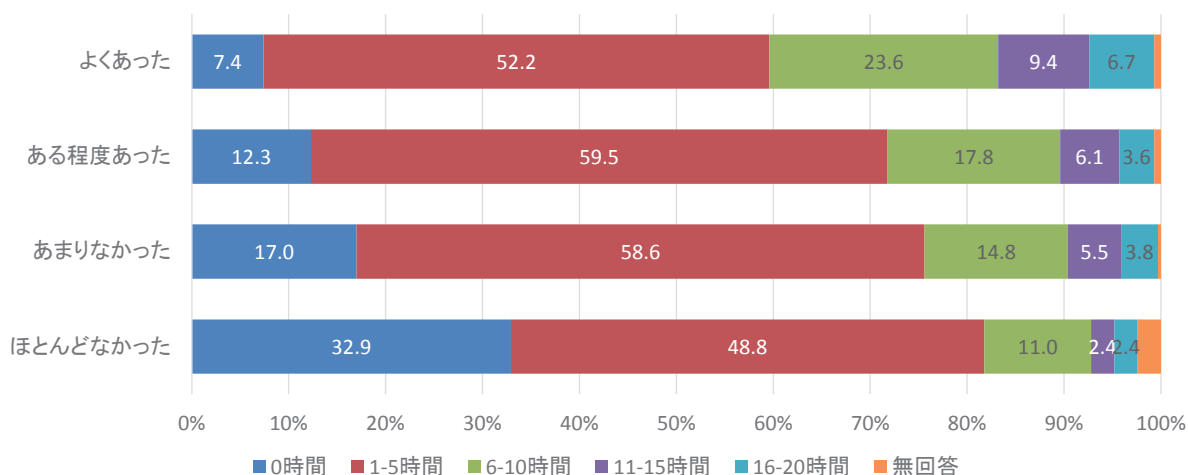


- グループワーク等への積極的な参加が学習時間の増加にやや効果があることはうかがえる
 - GWの機会は増加したが、積極的に参加していない学生が約2割

27

学習時間を増加させる要因(2)

小テストや中間課題が課されると授業の予習・復習時間(1・2年生)

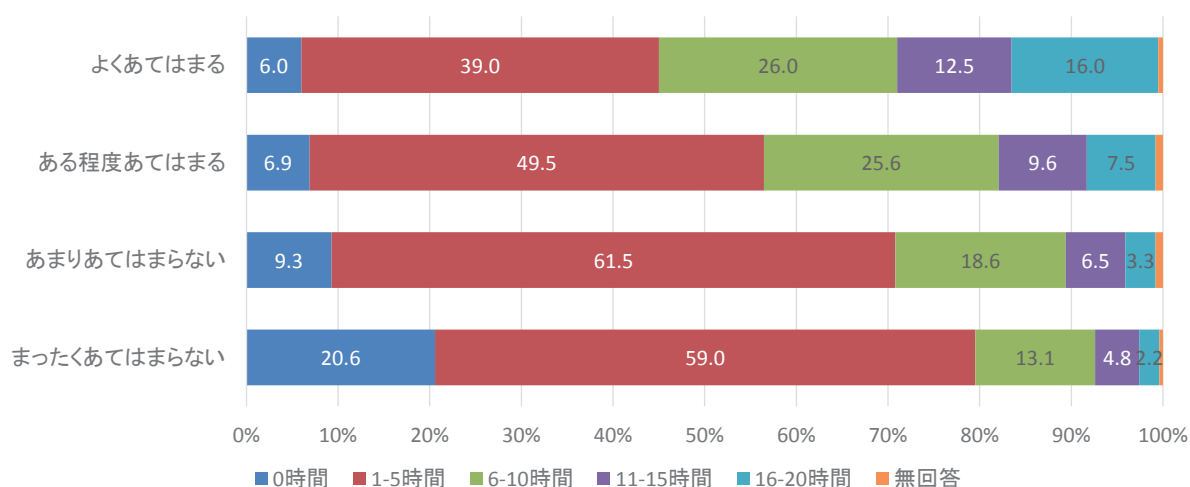


- 小テストや中間課題で強制的に学習させることに一定の効果はあるものの、「よくあった者」でも最頻値は「1～5時間」
 - そもそも「よくあった」、「ある程度あった」が既に約9割

28

学習時間を増加させる要因(3)

先生に質問したり勉強の仕方を相談していると授業の予習・復習時間(1・2年生)



- ・ 教員とのインタラクションの頻度が学習時間に影響する
 - － 学生の「意欲」の問題なのか、教員との接触が可能な「機会」がどれほど用意されているのか

29

まとめにかえて

「学習時間」をめぐる課題

30

「学習時間」の増大は可能か

- 政策的にも繰り返し言及されているにもかかわらず、実現していない
- 実現を阻む構造的要因
 - 1～2年次における履修科目数の多さ
 - 1つの授業科目に集中して勉強する時間が取れない
 - そもそも開講される授業科目が多い
 - きめ細かい対応をすれば教員側の授業準備の負担が増大
 - ただし、授業(講義)の「大規模化」は望ましくない
 - 現在の大学教育でも、学生が成長(を実感)していないわけではない
 - 大学教育の目的として、学生は「汎用的能力」の獲得よりも、「専門的知識」の修得を重視
 - 「詰め込み主義」は学生の目的にも合致
 - 「汎用的能力」をいかにして伸張するかが課題
 - むしろ授業科目の中で対応しようとしている＝授業のAL化

31

「単位制度」は時代遅れ？

- 単位制度はあくまでも「時間」を基準に学習量を測定しているだけであって、学習の成果(「質」)を考慮していない、という批判は制度導入直後からなされている
 - 米国でも理念上想定される学習量は実現しておらず、単位制度は「虚構」だという見方もある
 - 学習の「質」のコントロールは、専門家としての大学教員に委ねられている(必要な学習量と成績評価)
 - 単位制度が適切に運用されていなければ、学習の成果を直接的に測定しようとする社会的要求が高まる
 - 大学教育の自律性を確保するための装置になっているという観点からの運用も重要
 - 個々の授業の自律性と学習プログラム全体の体系性とのバランスをどう図るか

32

- 東大CRUMP調査
 - 金子元久(2013)『大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ』, 東京大学出版会
 - 東京大学大学経営・政策研究センター『全国大学生調査』(http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kiso2008_01.pdf)
- 大学生等の学習状況に関する調査
 - 国立教育政策研究所(2018)『学生の成長を支える教育学習環境に関する調査研究』(平成28～29年度プロジェクト研究報告書)
http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_digest_h29/rep0301-all.pdf
 - 朴澤泰男(2018)「学業成績と単位修得状況からみた大学生の学習」, 上記報告書, 161-174
- その他
 - DZHW・EUROSTUDENT(2018) *Social and Economic Conditions of Student Life in Europe*
(http://www.eurostudent.eu/download_files/documents/EUROSTUDENT_VI_Synopsis_of_Indicators.pdf)
 - NSSE(2018) Summary Tables
(http://nsse.indiana.edu/html/summary_tables.cfm)
 - 小方直幸(2018)「授業を通じた学生の成長—善意の促進と無意識の阻害」, 『IDE現代の高等教育』598, 9-14

ご静聴ありがとうございました

東洋大学の学生の学修時間

ー 「新入生アンケート」「在校生アンケート」「卒業時アンケート」による検証



東洋大学 IR室

劉 文君

構成

はじめに（背景・データ説明）

I 学修時間の実態

- 1.1 新入生高校3年時授業外での学習時間
- 1.2 在校生の学生生活時間と学修時間の実態

II 学修時間との関連要因

- 2.1 高校3年時授業外での学習時間と学力
- 2.2 学修時間との関連要因に関する分析
 - (1) 学修時間と学修姿勢
 - (2) 学修時間と授業形態
 - (3) 学修時間と生活・留学経験
 - (4) 学修時間と学修成果

III 課題：学生の「学修時間」を増やすために

はじめに

中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（2012年）：「質を伴った学修時間の実質的な増加・確保による主体的な学びの確立」、「教育の質向上は学修時間の増加から」

「2040年を見据えた高等教育のグランドデザイン（答申）」（2018年11月26日中央教育審議会）：新たな公表義務化の対象として例示されている教育成果情報の中には、「学修時間」「学生の成長実感・満足度」「学修に対する意欲」など、学生調査を通して把握されるものも多い。

3

アンケート調査の概要

	新入生アンケート	在校生アンケート	卒業時アンケート																
対象	1年生	1・2・3年生	4年生																
実施方法	ToyoNet-ACE (WEBアンケート)	ToyoNet-ACE (WEBアンケート)	マークシート																
実施時期 (日)	2018年4月19日～5月26日	2017年11月13日～12月11日	2018年3月23日																
概要	対象総数：7,603人 回答者数：4,588人 回答率：60.3%	対象総数：22,487人 回答者数：7,397人 回答率：32.8% <table border="1"> <thead> <tr> <th></th><th>対象者数</th><th>回答者数</th><th>回答率</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1年</td><td>7,968</td><td>3,269</td><td>41.0%</td></tr> <tr> <td>2年</td><td>7,375</td><td>2,405</td><td>32.6%</td></tr> <tr> <td>3年</td><td>7,144</td><td>1,723</td><td>24.1%</td></tr> </tbody> </table>		対象者数	回答者数	回答率	1年	7,968	3,269	41.0%	2年	7,375	2,405	32.6%	3年	7,144	1,723	24.1%	対象総数：6,412人 回答者数：5,962人 回答率：92.3%
	対象者数	回答者数	回答率																
1年	7,968	3,269	41.0%																
2年	7,375	2,405	32.6%																
3年	7,144	1,723	24.1%																

4

構成

はじめに（背景・データ説明）

I 学修時間の実態

- 1.1 新入生高校3年時授業外での学習時間
- 1.2 在校生の学生生活時間と学修時間の実態

II 学修時間との関連要因

- 2.1 高校3年時授業外での学習時間と学力
- 2.2 学修時間との関連要因に関する分析
 - (1) 学修時間と学修姿勢
 - (2) 学修時間と授業形態
 - (3) 学修時間と生活・留学経験
 - (4) 学修時間と学修成果

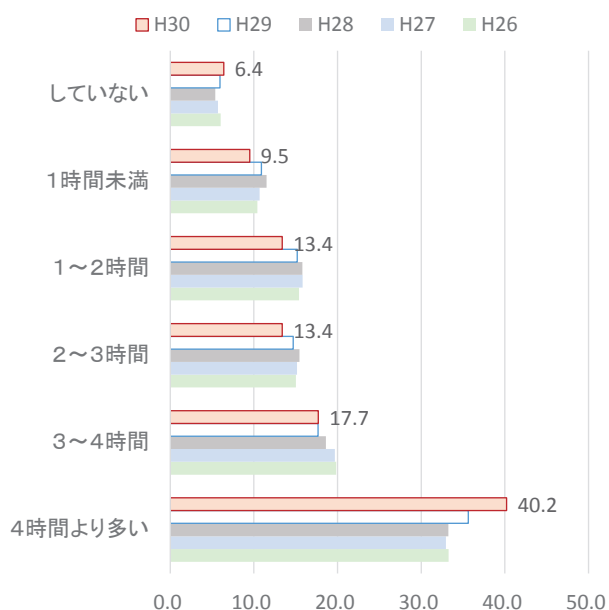
III 課題：学生の「学修時間」を増やすために

5

1.1 新入生高校3年時授業外での学修時間

平成30年度：平均4.46時間

時系列的変化（％・H26～H30）



東進「難関大現役合格者2018年合格発表直後アンケート調査」結果

難関大受験者の学習時間（合否別）

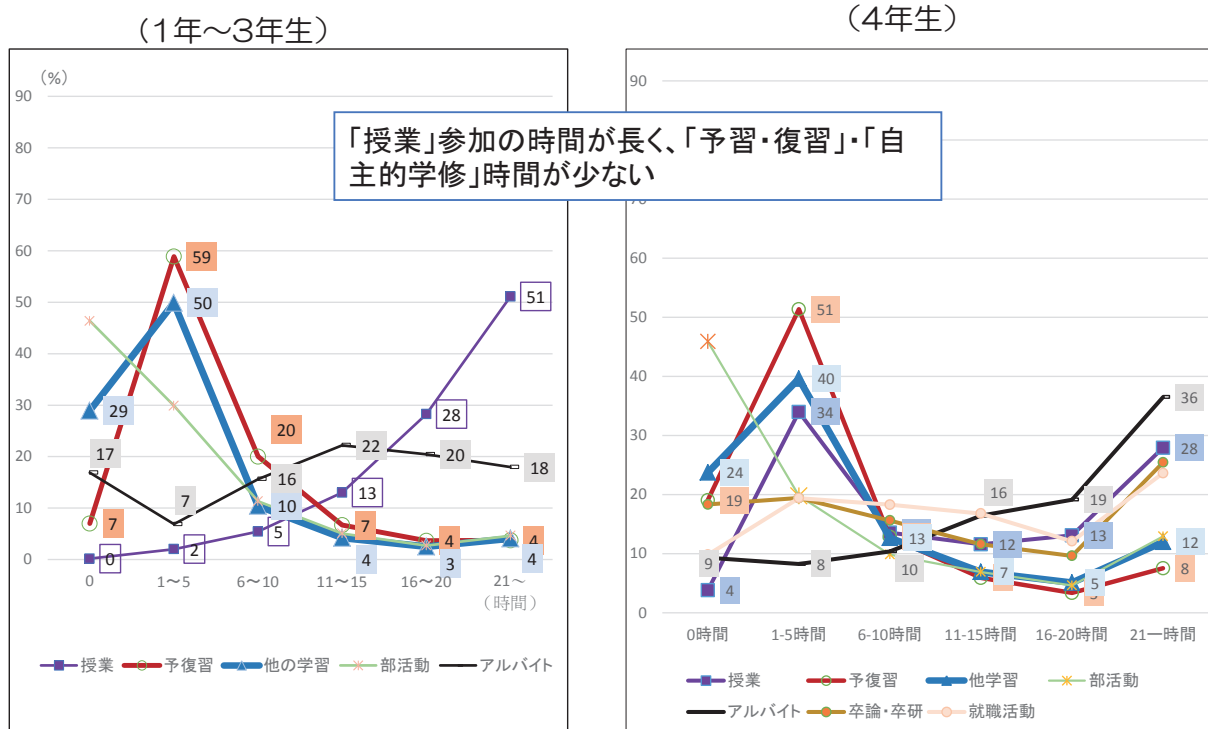
	現役合格者	不合格者	差
高3・1日あたり	6時間9分	5時間49分	20分
高2・1日あたり	2時間49分	2時間41分	8分
高1・1日あたり	2時間7分	1時間49分	18分
3年間の学習時間 (学校の授業以外)	4,044時間	3,760時間	284時間

難関大現役合格者高校3年時学校以外での勉強時間：平均6時間9分

6

1.2 在校生の学生生活時間と学修時間の実態①

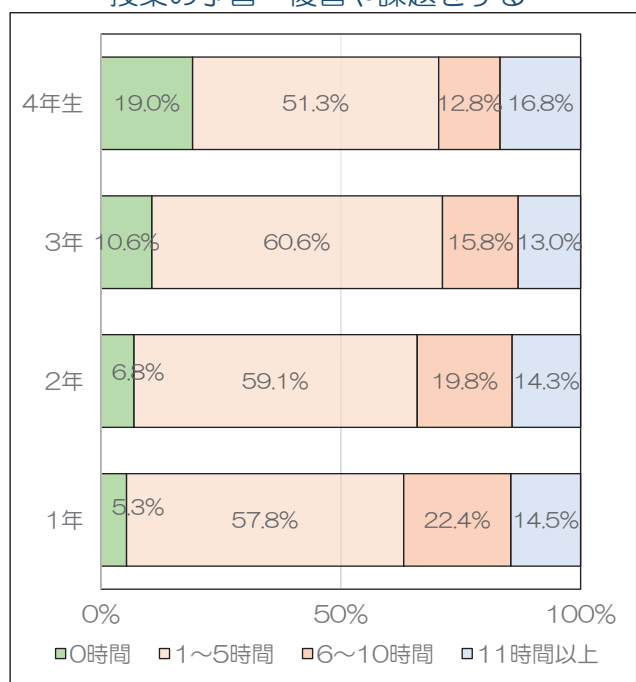
生活時間(1週間)



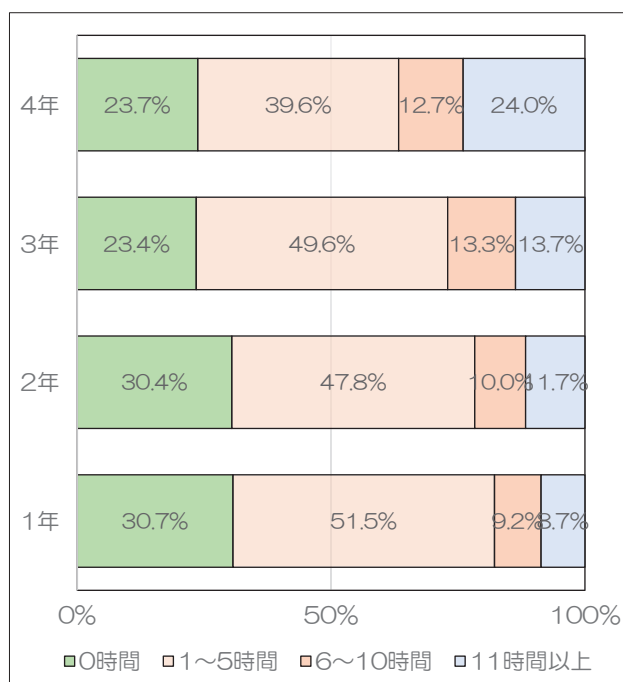
7

1.2 在校生の学生生活時間と学修時間の実態②

授業の予習・復習や課題をする



授業と関係ない自主的な学習時間



8

構成

はじめに（背景・データ説明）

I 学修時間の実態

1.1 新入生高校3年時授業外での学習時間

1.2 在校生の学生生活時間と学修時間の実態

II 学修時間との関連要因

2.1 高校3年時授業外での学習時間と学力

2.2 学修時間との関連要因に関する分析

(1) 学修時間と学修姿勢

(2) 学修時間と授業形態

(3) 学修時間と生活・留学経験

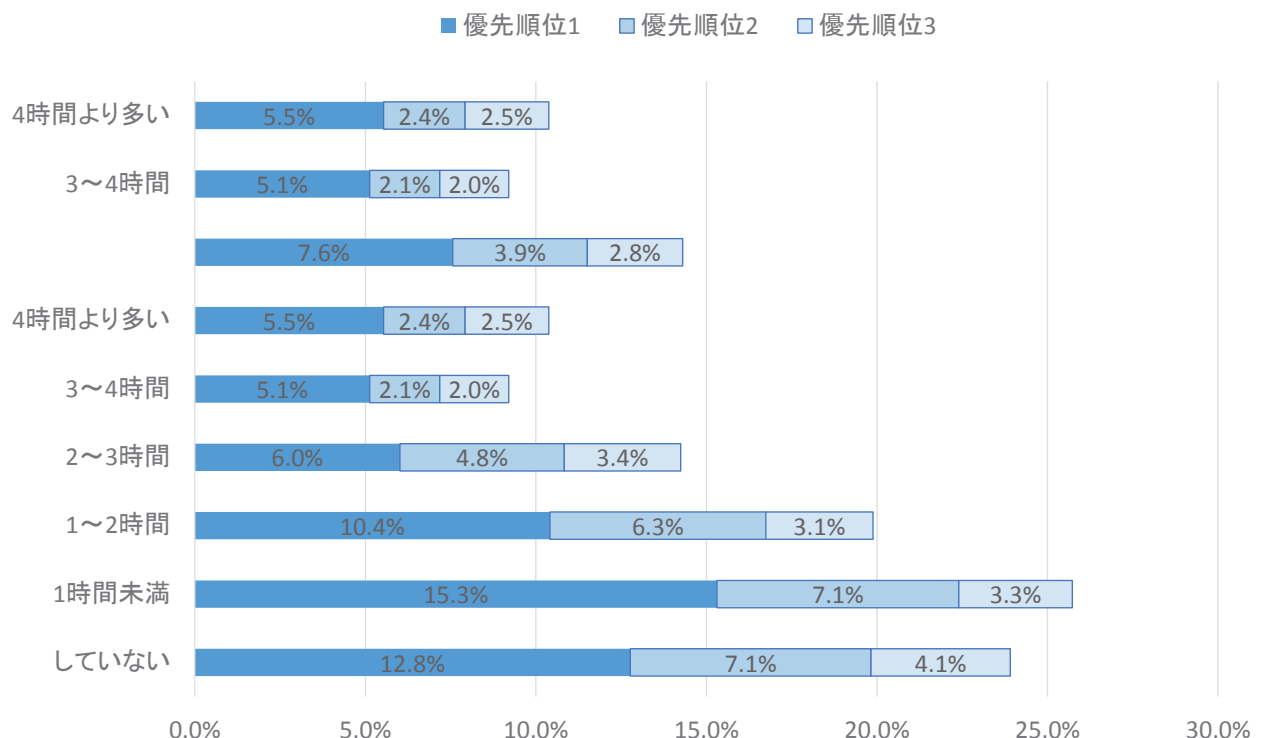
(4) 学修時間と学修成果

III 課題：学生の「学修時間」を増やすために

9

2.1 高校3年時授業外での学習時間と学力①

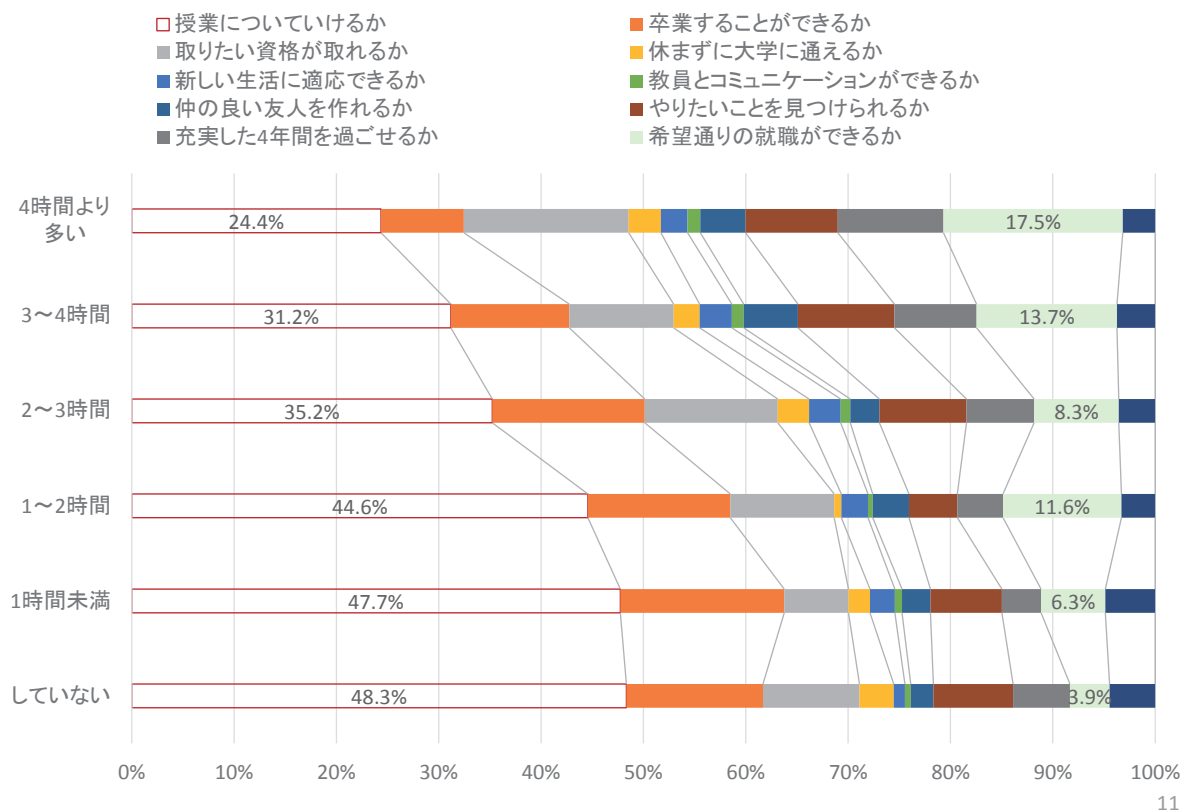
学修時間×「高校までの補習教育」



10

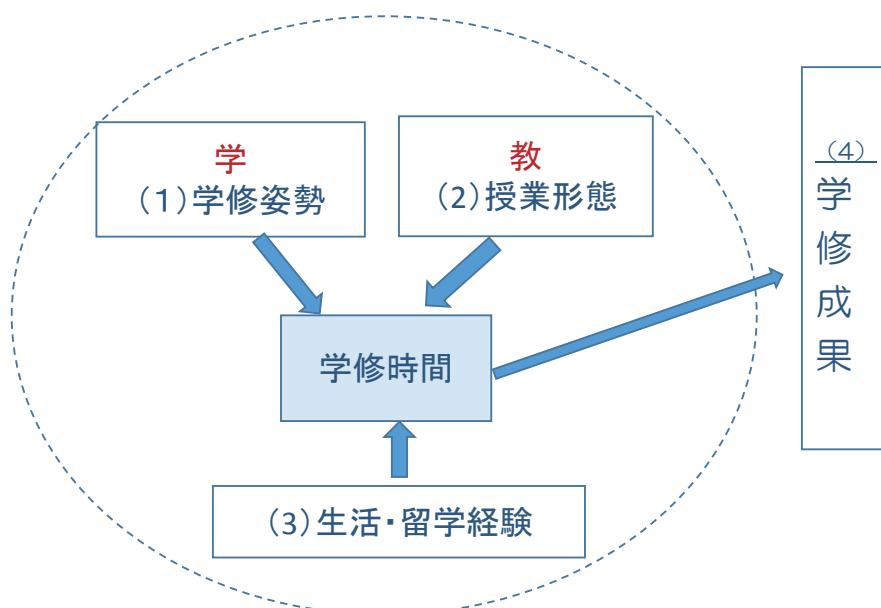
2.1 高校3年時授業外での学習時間と学力②

学修時間×「不安なことについて- 優先順位1」



11

2.2 学修時間との関連要因に関する分析



12

2.2 (1) 学修時間と学修姿勢

(重回帰分析)

学修時間 学修姿勢	自主的な学習	授業の 予習・復習	GPA
	標準化係数 (ベータ)	標準化係数 (ベータ)	標準化係数 (ベータ)
(定数)	***	***	***
興味がわからない授業でもきちんと出席する	-0.11 ***	-0.04 **	0.15 ***
なるべく良い成績を取るようになっている	-0.02	-0.02	0.33 ***
グループワークやディスカッションに積極的に参加している	0.06 ***	-0.04 **	0.01
必要な予習や復習をしたうえで授業にのぞんでいる	0.13 ***	0.23 ***	-0.01
大学の友人同士で授業の予復習やわからないところを勉強する	-0.05 ***	0.04 **	-0.03 *

* : $p < .05$ 、** : $p < .01$ 、*** : $p < .001$

ー「在校生アンケート」

13

2.2 (2) 学修時間と授業形態①

授業形態と「授業の予習・復習時間」

授業形態	標準化係数 (ベータ)
適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される	16.1
授業内容に興味がわくように工夫されている	15.9
授業中に自分の意見や考え方を述べる	13.5
理解がしやすいように教え方が工夫されている	13.3
主に英語で行われる授業	11.3
TAなどによる補助的な指導がある	11.2
グループワークなど、学生が参加する機会がある	8.6
期末試験のほかに小テストやレポートなどの課題が出される	7.9
出席が重視される	6.4

「予習・復習」の時間を増やすに、「参加型」・「誘導型」授業は「統制型」授業よりプラスの効果がある

標準化単回帰係数 (すべて99%水準で有意、%表示)

ー「在校生アンケート」

14

2.2 (2) 学修時間と授業形態②

授業形態と「大学の授業と関係ない自主的な学習時間」

授業形態	標準化係数(ベータ)
グループワークなど、学生が参加する機会がある	10.8
期末試験のほかに小テストやレポートなどの課題が出される	9.9
適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される	8.2
授業内容に興味がわくように工夫されている	7.2
理解がしやすいように教え方が工夫されている	6.8
出席が重視される	6.5
主に英語で行われる授業	6.2
授業中に自分の意見や考え方を述べる	6.0
TAなどによる補助的な指導がある	3.1

「自主的な学習時間」の時間を増やすにも、「参加型」・「誘導型」授業は「統制型」授業よりプラスの効果がある

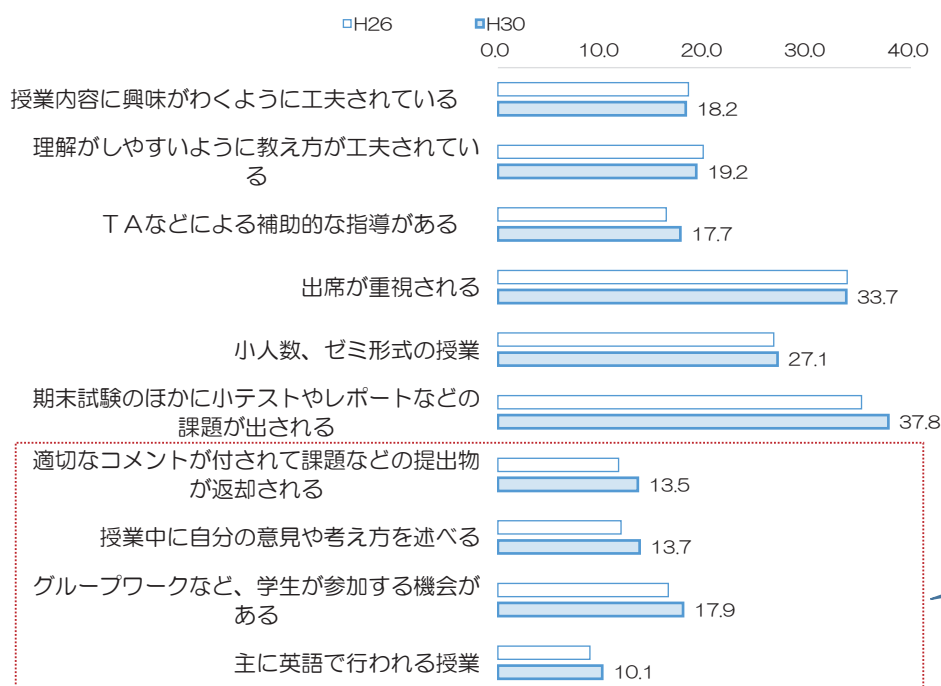
標準化単回帰係数（すべて99%水準で有意、%表示）

ー「在校生アンケート」

15

2.2 (2) 学修時間と授業形態③

学生が経験した授業形態の変化（「よくあった」の回答率）



「参加型」授業が増える傾向がある

16

2.2 (3) 学修時間と生活・留学経験①

「予習・復習時間」が長い場合、「自主的な学修」時間も長い

予習・復習時間（重回帰分析）

	標準化係数 (ベータ)
(定数)	***
授業など（実験・実習を含む）への出席	0.20***
大学の授業と関係ない自主的な学習	0.42***
サークル・部活動	0.07***
アルバイト	-0.01

自主的な学修時間（重回帰分析）

	標準化係数 (ベータ)
(定数)	***
授業など（実験・実習を含む）への出席	-0.02*
授業の予習・復習や課題をする	0.44***
サークル・部活動	0.06***
アルバイト	0.03**

* : $p < .05$ 、** : $p < .01$ 、*** : $p < .001$

－「在校生アンケート」

17

2.2 (3) 学修時間と生活・留学経験③

自主的な学習時間と留学経験

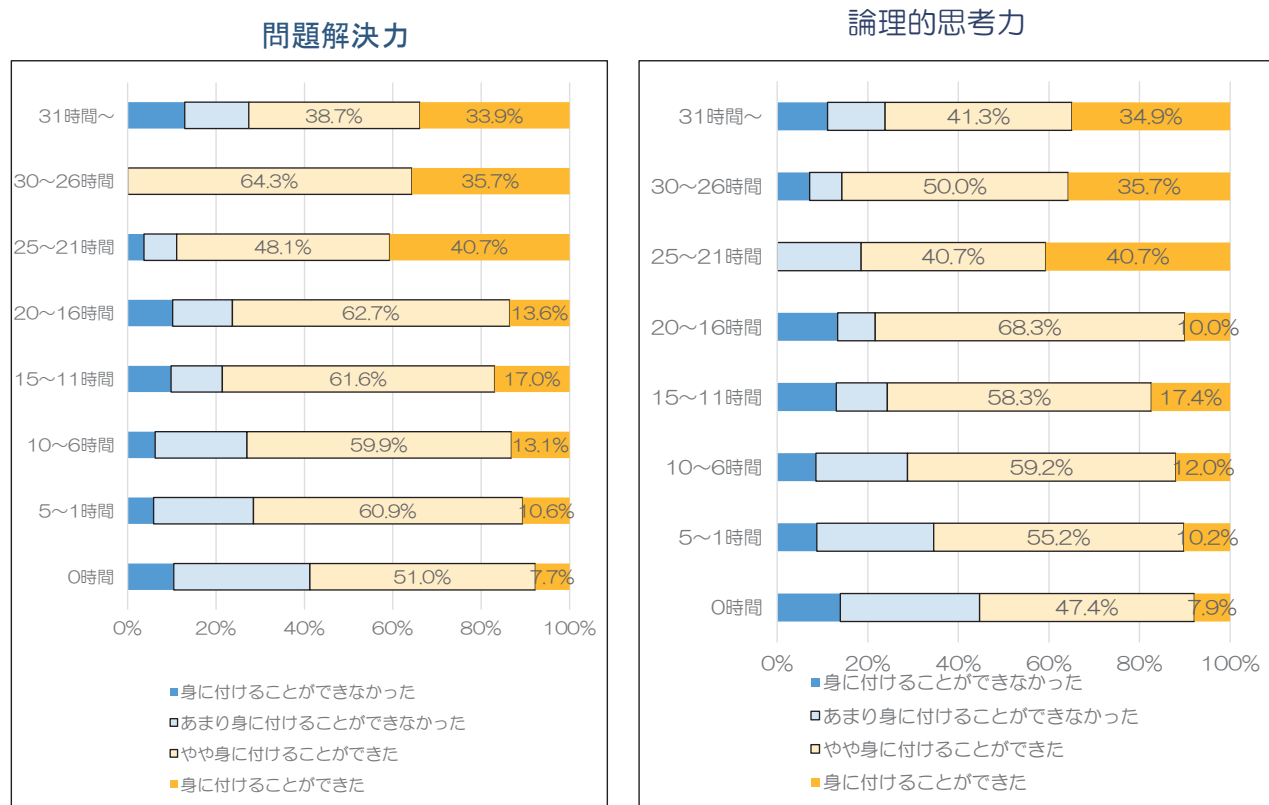
	留学（1ヶ月以内）		留学（1～4月）		留学経験（4月～1年）	
	経験なし	経験ある	経験なし	経験ある	経験なし	経験ある
0時間	26.3%>	17.3%	25.5%>	17.1%	25.5%>	17.1%
5～1時間	40.8%>	36.4%	41.5%>	32.5%	41.7%>	31.5%
10～6時間	12.4%	13.4%	12.7%	13.2%	12.5%	13.7%
15～11時間	6.5%<	8.5%	6.4%<	9.1%	6.4%<	9.4%
20～16時間	4.4%<	6.8%	4.5%<	7.5%	4.4%<	7.7%
25～21時間	2.9%<	5.4%	3.0%<	6.2%	3.1%<	6.0%
30～26時間	2.5%<	3.9%	2.4%<	4.7%	2.3%<	4.7%
31時間～	4.2%<	8.3%	4.1%<	9.8%	4.1%<	10.0%

「留学経験がある」方が「自主的な学修時間」が長い

－「卒業時アンケート」

18

2.2 (4) 学修時間と学修成果（身に着けた能力）



ー「在校生アンケート」（2、3年生）

19

構成

はじめに（背景・データ説明）

I 学修時間の実態

- 1.1 新入生高校3年時授業外での学習時間
- 1.2 在校生の学生生活時間と学修時間の実態

II 学修時間との関連要因

- 2.1 高校3年時授業外での学習時間と学力
- 2.2 学修時間との関連要因に関する分析
 - (1) 学修時間と学修姿勢
 - (2) 学修時間と授業形態
 - (3) 学修時間と生活・留学経験
 - (4) 学修時間と学修成果

III 課題：学生の「学修時間」を増やすために

20

分析から分かったこと

入学者の多様化が進んでいる中で、入学の時点で学生の学修時間（学修習慣）の差異があり、それが学力と関連している。また在学中の学修時間は学生自らの学修姿勢、生活・留学経験及び教員の授業形態などと関連している。

学生の「学修時間」を増やすために

学生の学修、生活の実態をより詳細に把握し、学内での学部別との比較、時系列的な比較、他大学とのベンチマーキングなどを継続的に行うことが必要である。

学修時間を増えるために、現状（実態）を踏まえ、関連要因を分析し、学生を類型別で初年次教育の実施、留学の推進、学生の学修意欲を高めること、授業形態の改善などが重要である。

とりわけ、分析結果を学内の関係者が共有し、問題の発見、改革のきっかけをつかむことが不可欠である。

21

ご清聴ありがとうございました



自律的な学修時間 ー現状と課題

金子 元久

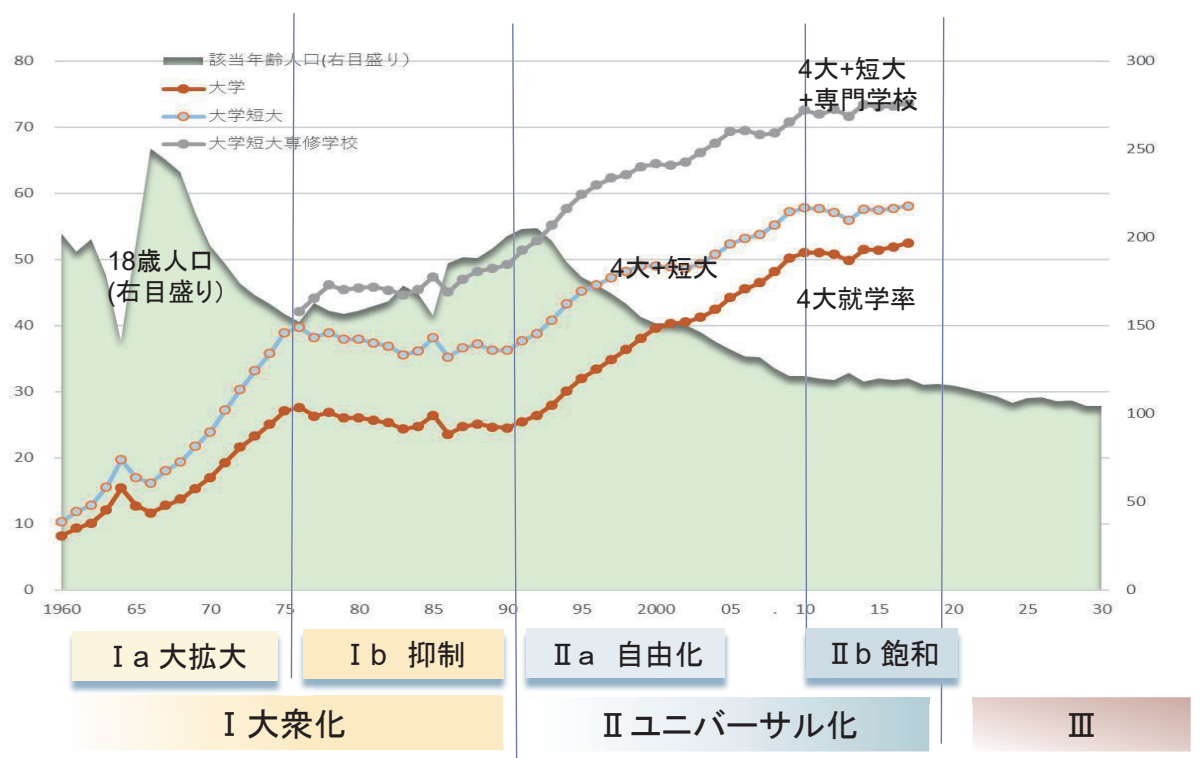


東洋大学
2018年12月15日

経済・社会の転換と大学教育

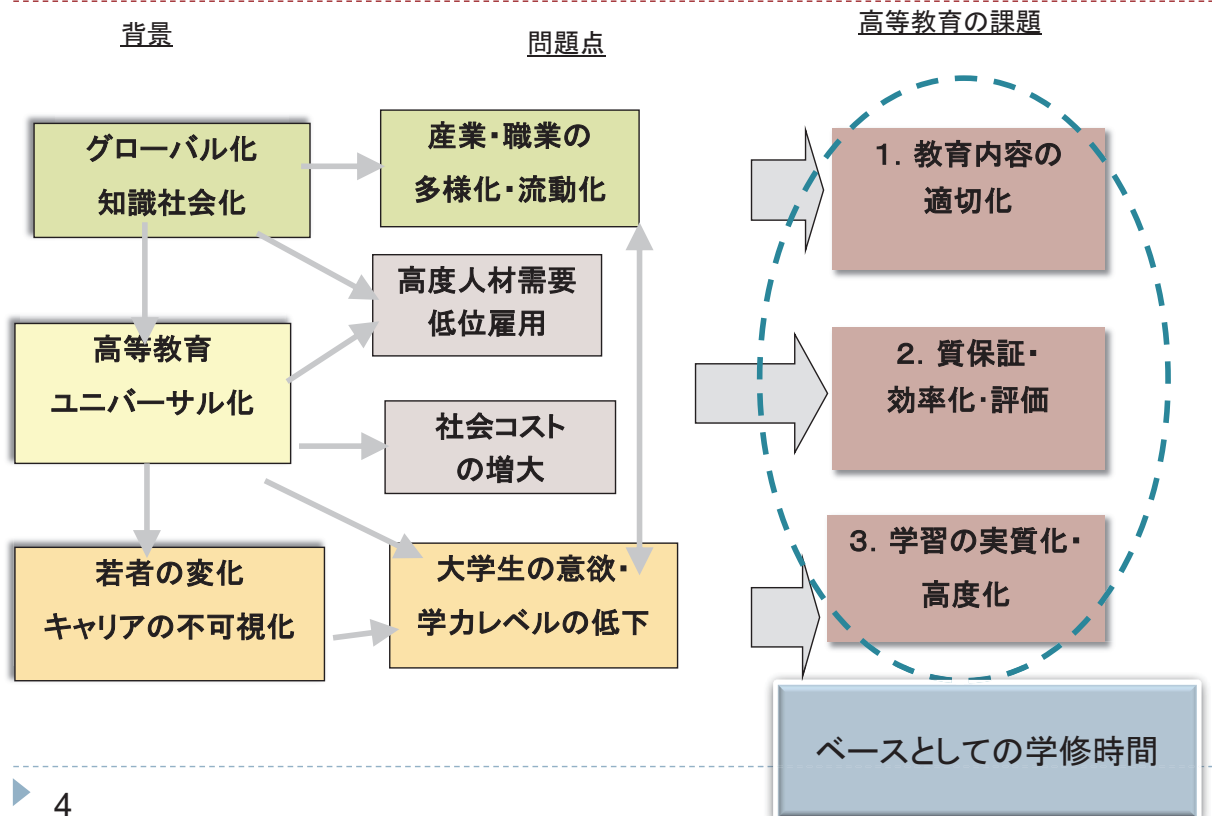
- ▶ 20世紀
 - ▶ 経済成長
 - ▶ 高等教育の量的拡大
- ▶ 21世紀
 - ▶ 低成長の中での恒常的革新
 - ▶ 大学教育の質の転換
- ▶ 転換期としての2010年代

戦後の高等教育



3

社会環境の変化と大学



4



1. なぜ学修時間か

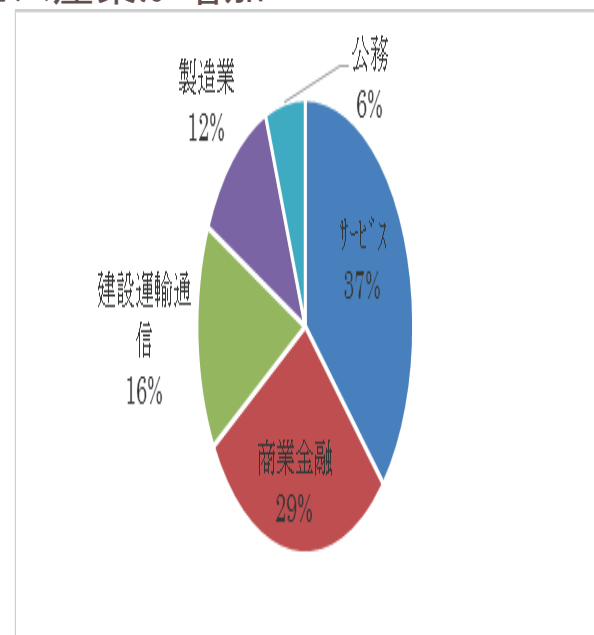
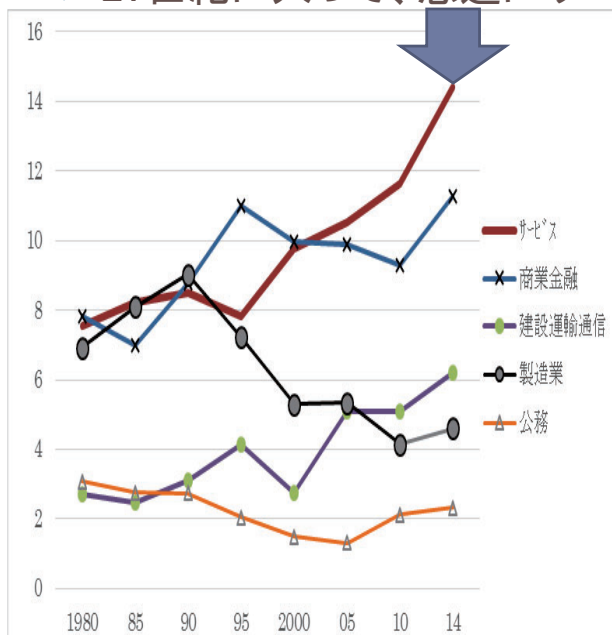
2 改革の現段階

3 展望

産業構造の多様化・流動化

▶ 大卒者の就業先

▶ 21世紀に入って、急速にサービス産業が増加



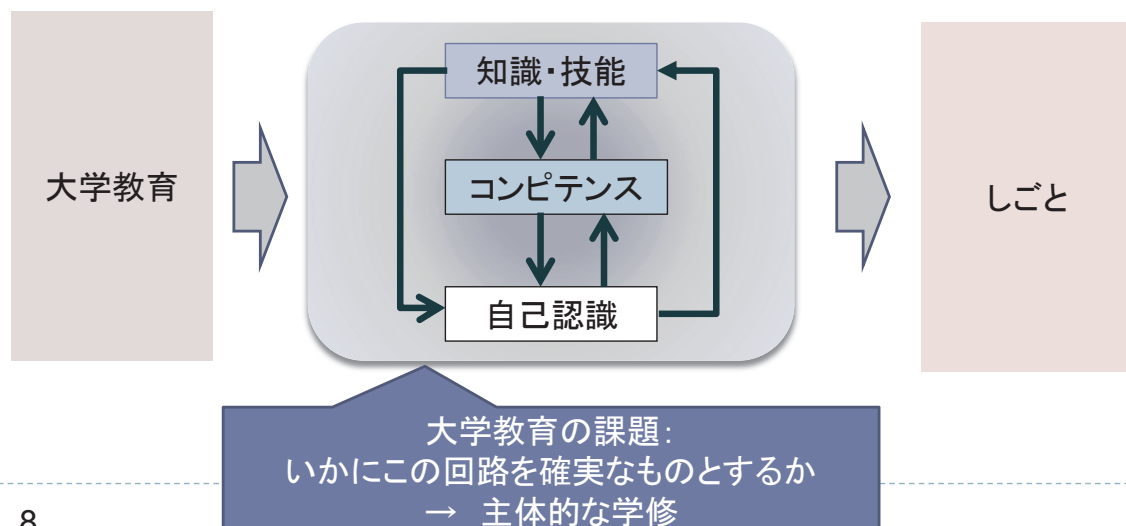
職業の要求の変化

- ▶ これまでの社会
 - ▶ 製造業を中心とする大組織、職場組織による知識伝達、企業間の安定した関係
 - ▶ これに大学教育は対応していた
- ▶ これからの社会
 - ▶ 高い流動性、非安定性
 - ▶ 既存組織の枠組みの限界
 - ▶ 活動分野、組織の恒常的な組み換え
- ▶ そこで必要とされる能力
 - ▶ 現実を広い視野から客観的にとらえる知識的基盤
 - ▶ 異質なものと協力から、新しいものを作る態度
 - ▶ それを支える、自己認識

▶ 7

大学教育としごとを結ぶもの

- ▶ 大学教育
 - ▶ 知識・汎用能力・自己認識 を結ぶ回路を作る
- ▶ しごと
 - ▶ その回路が状況に応じて、新しい方向を見つける能力を作る

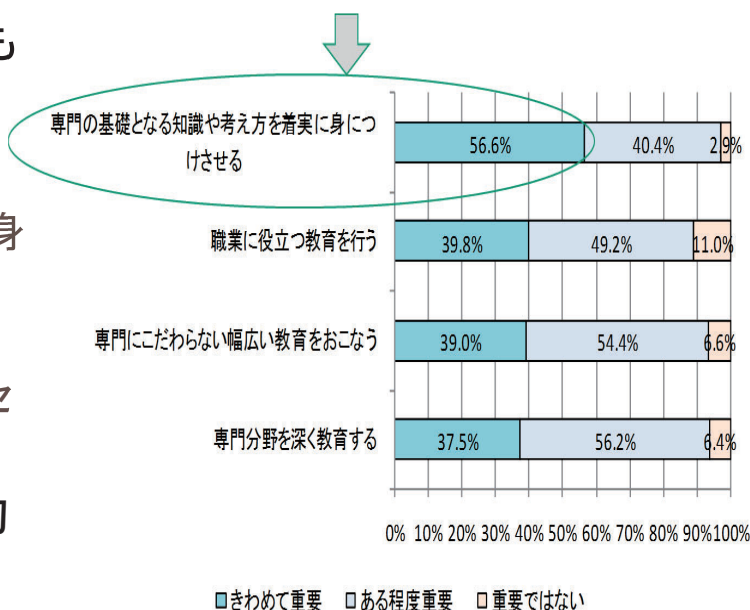


▶ 8

大学教育は何ができるか

- ▶ 三つの要素はいずれも大切
- ▶ しかし最も重要なのは
 - ▶ 着実に知識・考え方を身に着ける
 - ▶ 自分自身と知識とを対峙させ、統合するプロセス
- ▶ 基礎となるのは自律的な学修
 - ▶ それを促す授業

大卒社会人調査
「これからの大学教育に必要なもの」

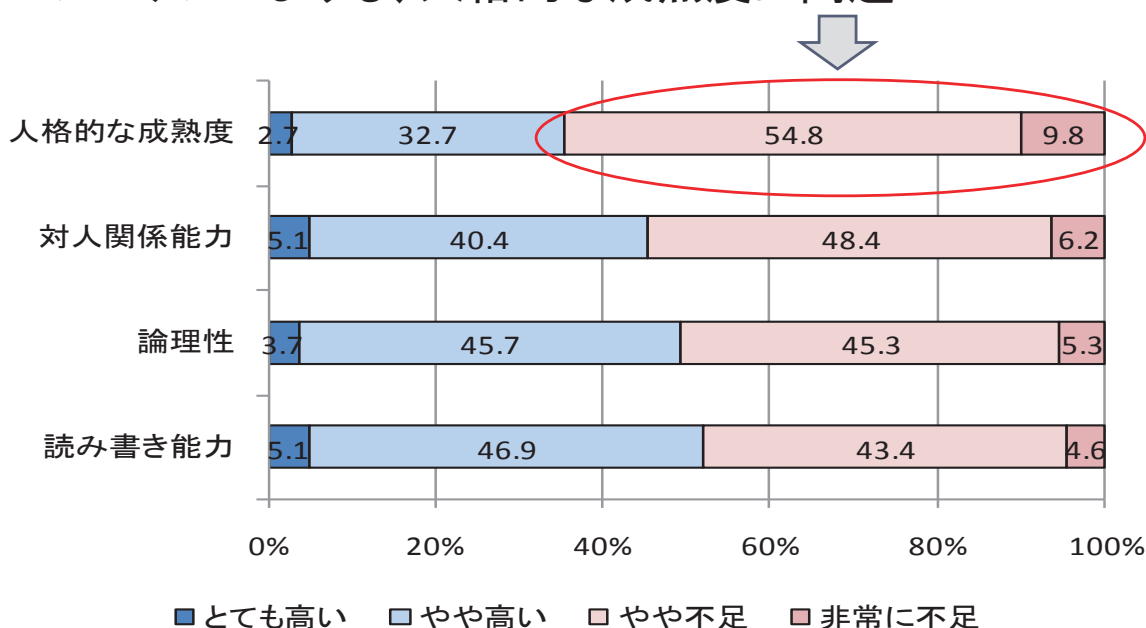


東京大学大学経営政策研究センター(CRUMP)『大学教育に関する職業人調査』
2009、回答者数 25,203人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

▶ 9

学生の成長

- ▶ コンピテンスよりも、人格的な成熟度に問題



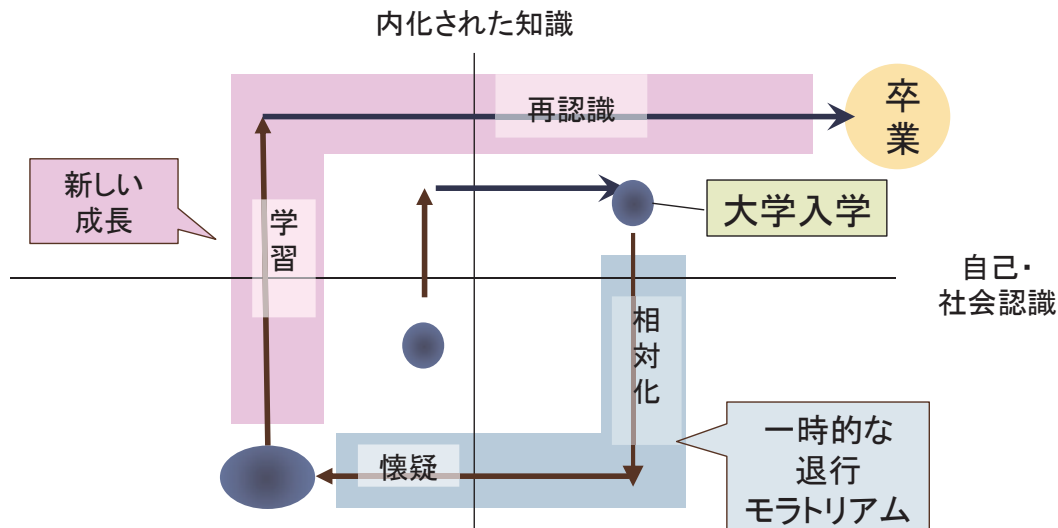
東京大学大学経営政策研究センター(CRUMP)『大学教育に関する人事担当者調査』2009、回答者数 8、157 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

▶ 10

「成長」のダイナミクス

▶ ダイナミックな過程

- ▶ 一時的な退行は不可避だけでなく、必要
- ▶ 退行期のサポートは重要な教育機能



▶ 11

人格的成長の条件としての学修

▶ 教育課程・授業

- ▶ 明確な達成目標
- ▶ それと論理的につながった授業科目編成

▶ トータルな教育環境

- ▶ 学修環境
- ▶ 個々の学生へのケア

▶ 主体的な学修

- ▶ 授業への参加
- ▶ 経験(勤労、留学、ボランティア)
- ▶ 自律的な学修時間

▶ 12

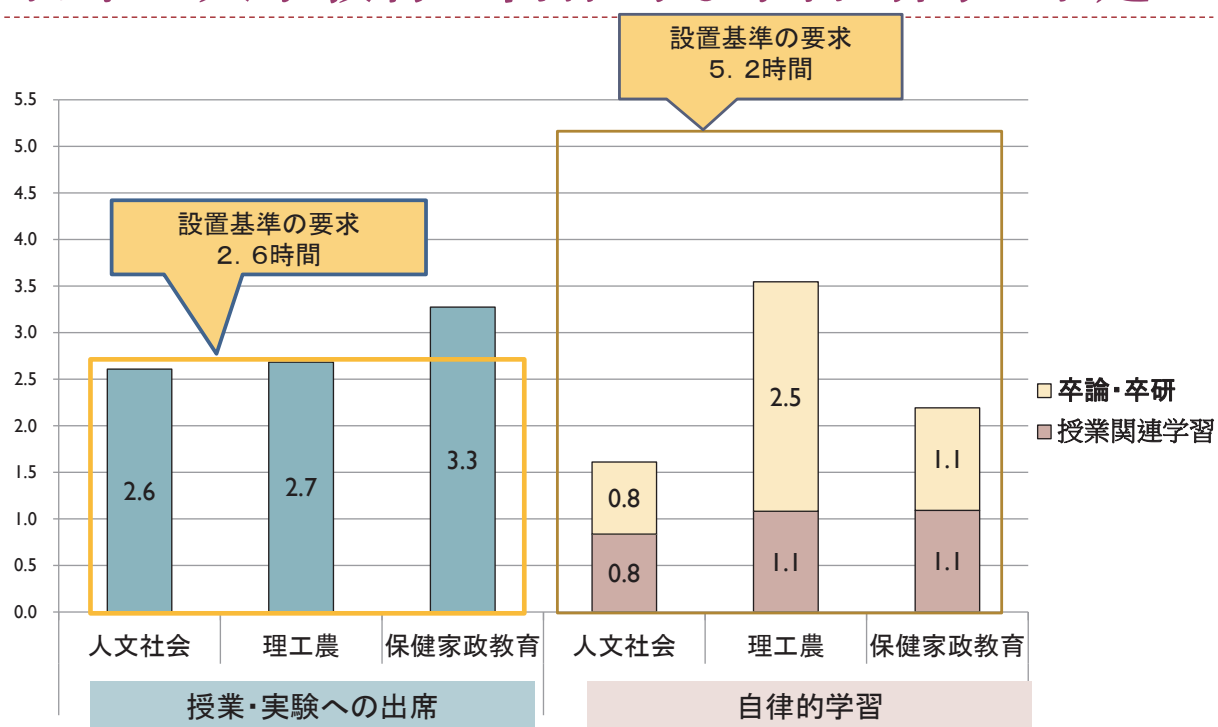


1. なぜ学修時間か

2 改革の現段階

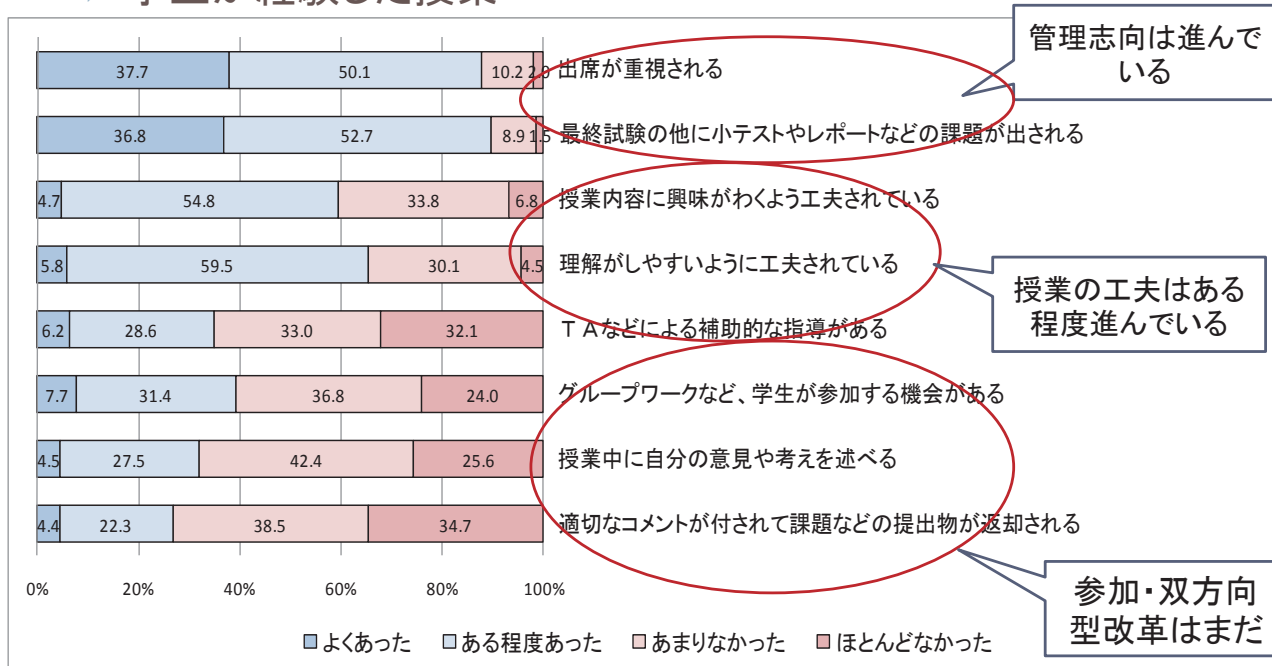
3 展望

日本の大学教育 自律的な学習時間の不足



授業方法の現状

▶ 学生が経験した授業



15 出所: 東京大学大学経営政策研究センター (CRUMP) 『全国大学生調査』 回答者 44,905人

授業方法によって学習時間は変わる

▶ 誘導型、参加型授業は、自律的学習時間を増やす

		学生タイプ			
授業方法		高同調	独立	受容	疎外
統制	出席重視	-0.7		-0.7	
	小テスト・レポート	0.4	0.5	0.6	
誘導	理解しやすい工夫	0.7	0.3	0.4	0.6
	興味わく工夫	0.9	0.4	0.7	0.8
	TAなどの補助	1.1	0.8	0.9	1.0
参加	グループワーク	0.9	0.7	0.9	1.4
	授業中に意見を述べる	1.1	0.9	0.7	1.2
	課題へのコメント	1.8	1.4	1.2	1.6

統制型授業は学習時間にはマイナス

誘導型授業はプラスの効果

参加型授業はプラスの効果
疎外型にも有効

帰係数(標準化、%) 有意率99%以上飲み表示。

出所: CRUMP 全国大学生調査から算出

16

2000年代からの動き

▶ 政策文書

- ▶ 2005年 中教審答申『我が国の高等教育の将来像』「大学教育改革GP」
- ▶ 2008年 中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』
- ▶ 2012年 中教審答申『予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ』
- ▶ 2013年 教育再生実行会議『第3次提言：これからの大学教育等の在り方について』同『第4次提言』
- ▶ 2014年 学校教育法改正 大学のガバナンス改革

▶ 補助金政策

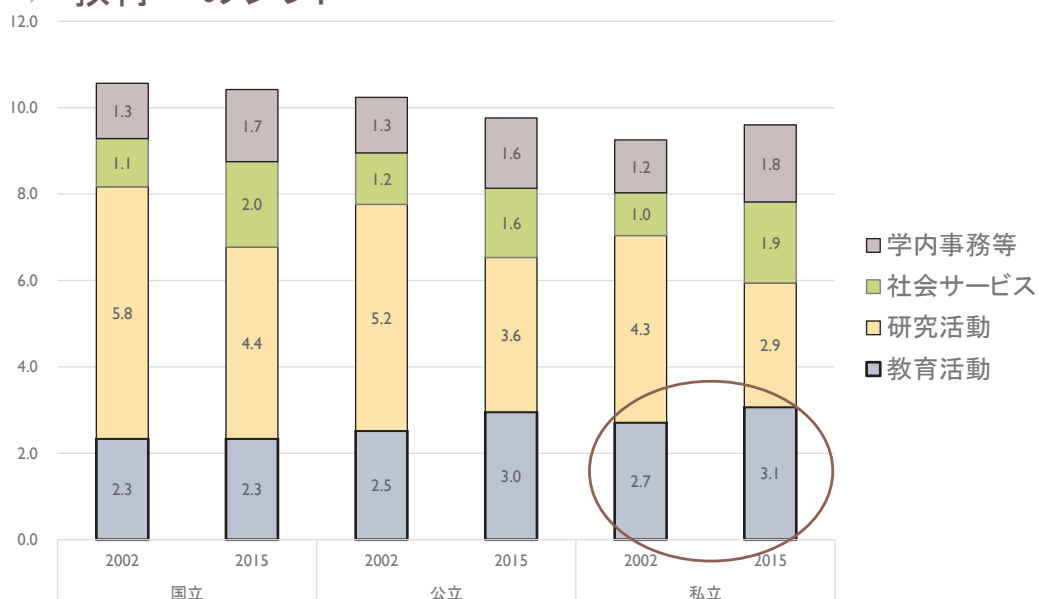
- ▶ 大学教育改革に関するKPI
- ▶ それに基づく補助金

▶ 17

教員の変化

▶ 活動時間の分布

▶ 教育へのシフト



▶ 18

出所：文部科学省『大学等におけるフルタイム換算データに関する調査』

授業の改善

▶ どのような授業を受けたか 2008年、2016年

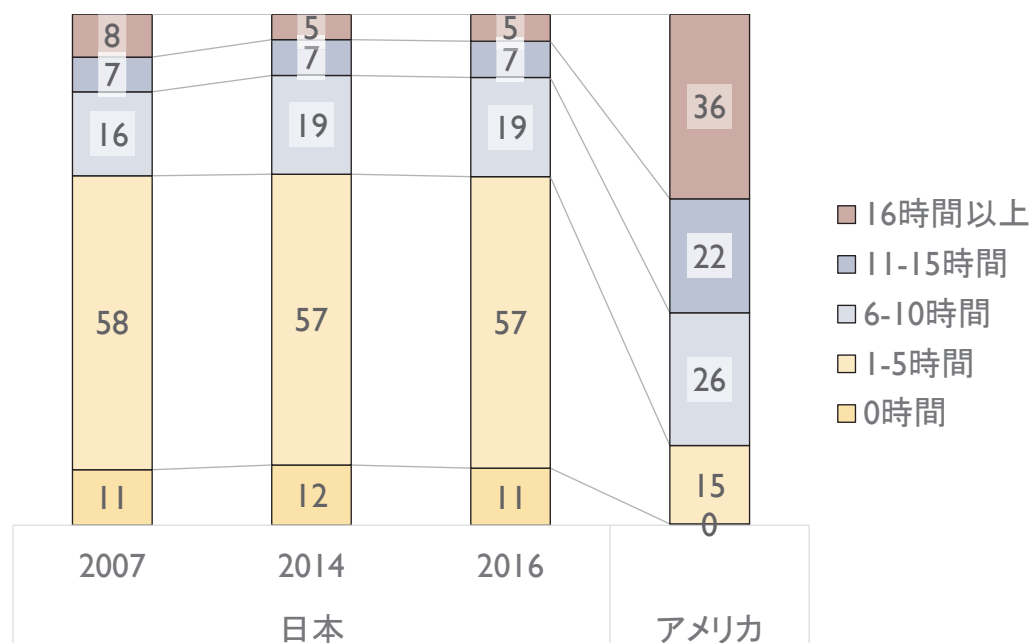


出所: CRUMP 調査2008、国立教育政策研究所調査2016

▶ 19

まだ学生の学習につながない

▶ 学修時間 —2007、2014、2016年調査



出所: 国立教育研究所『大学生の学習実態に関する調査研究について(概要)』、2016年3月、図4

▶ 20



1. なぜ学修時間か

2 改革の現段階

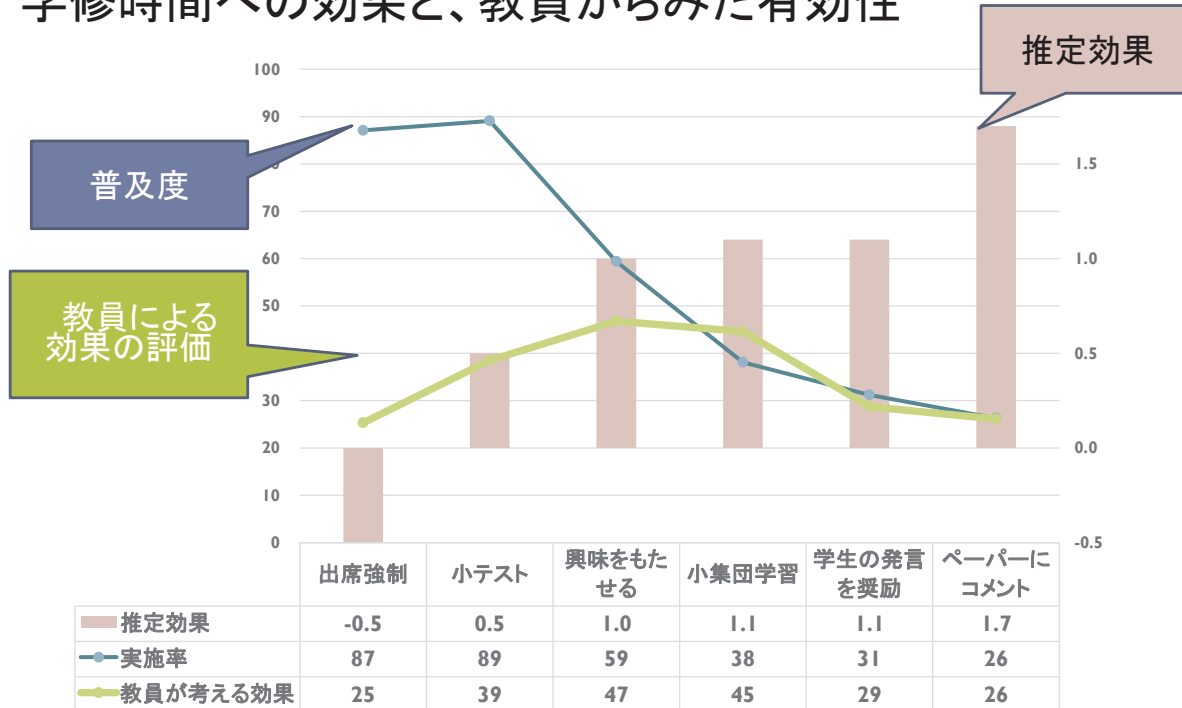
3 展望

何が不足しているのか

- ▶ 授業
 - ▶ 教員の態度、知識
- ▶ 組織
 - ▶ 大学としての体制
- ▶ 物的な基盤
 - ▶ ST比、設備

授業

▶ 学修時間への効果と、教員からみた有効性



▶ 23

授業改革の現段階

- ▶ 講義中心の授業は少なくなりつつある
- ▶ 増えているもの
 - ▶ わかりやすく、興味をもたせる授業、グループワーク
 - ▶ 学生を「抱きこむ」授業
 - ▶ これがないと授業を維持できない 私語、スマホ
 - ▶ 学生の満足度が高い、教員も充足感がある
 - ▶ しかし自律的な学習に結びつかない
- ▶ まだ少ないもの 一構造化された相互作用
 - ▶ 教員： 授業は内容、理論を説明し、疑問を発する
 - ▶ 学生： 授業の内容を、自分で再構成し、それを基礎として疑問にこたえる
 - ▶ 教員： 正しければ誉め、間違っていれば指摘する

▶ 24

組織

▶ 組織としての授業改善

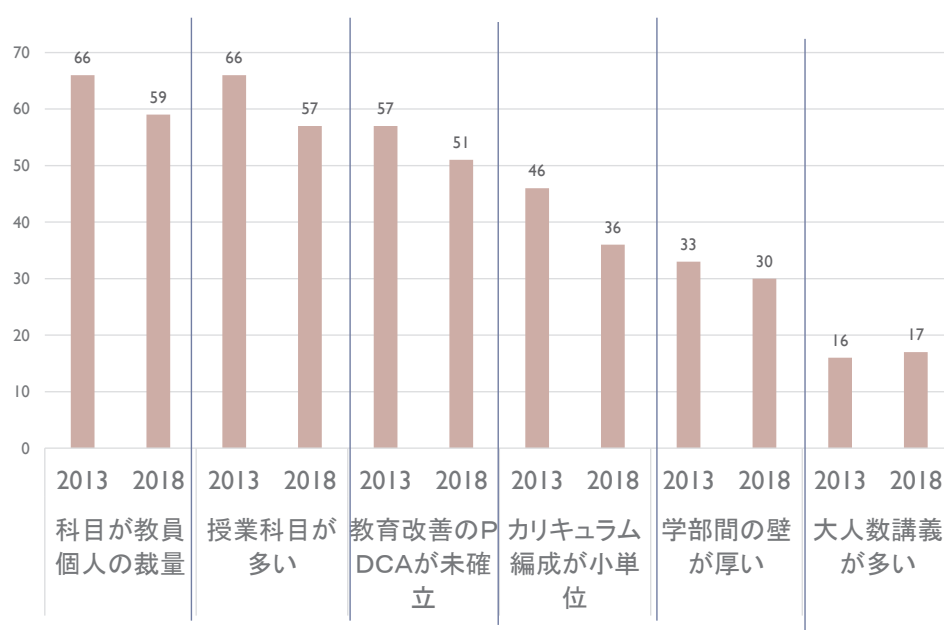
- ▶ より良い授業
 - ▶ 教員にとっては時間と努力が必要
- ▶ 少数の教員が実施するだけでは無意味
 - ▶ 学生は逃げる
- ▶ 組織的な努力が必要

▶ 現在の問題

- ▶ 上からの改革が、教員の自発性に結びついていない
- ▶ 条件が不十分
 - ▶ 教育改革は大学経営の問題でもある
- ▶ 個別大学で、何が問題なのかを明らかにする必要
 - ▶ IRの活用、大学の観点から、教員の観点から

▶ 25

▶ 大学教育改革の阻害要因 ― 学長の意見



出所：朝日新聞・河合塾『ひらく日本の大学』

▶ 26

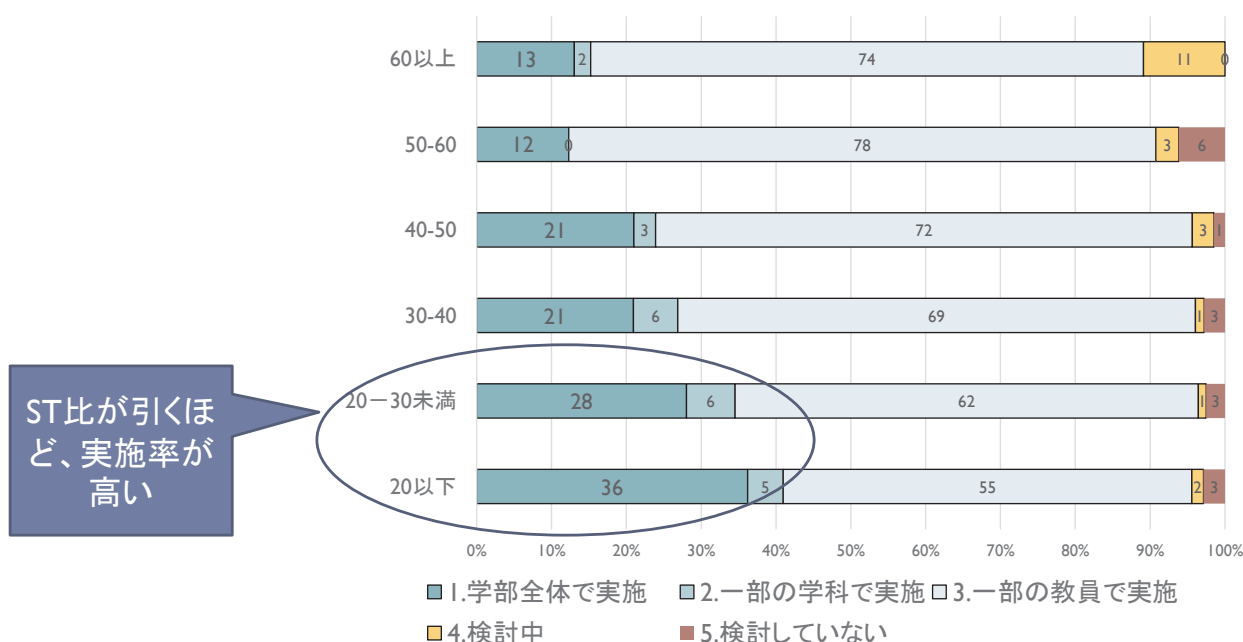
物的な条件

- ▶ これまでの実態
 - ▶ ST比が低い大学
 - ▶ 入学者を集めることが重要。授業改革への圧力が強い
 - ▶ 工夫しなければ学生がついてこない
 - ▶ ST比が高い大学
 - ▶ 大規模有名校が多い 教員の理念によって授業
 - ▶ 学生が適応
- ▶ これから、どのような大学でも学修が要求される
 - ▶ ST比が低いほど、手間をかけた授業ができる
 - ▶ 社会からもチェックされる
- ▶ ST比と授業改革のマッチングが必要

▶ 27

ST比と授業方法に密接な関連

- ▶ 「提出物にコメントをつけて返却」



▶ 28

N=1817, 出所:朝日新聞・河合塾「ひらく日本の大学」2017、学部調査

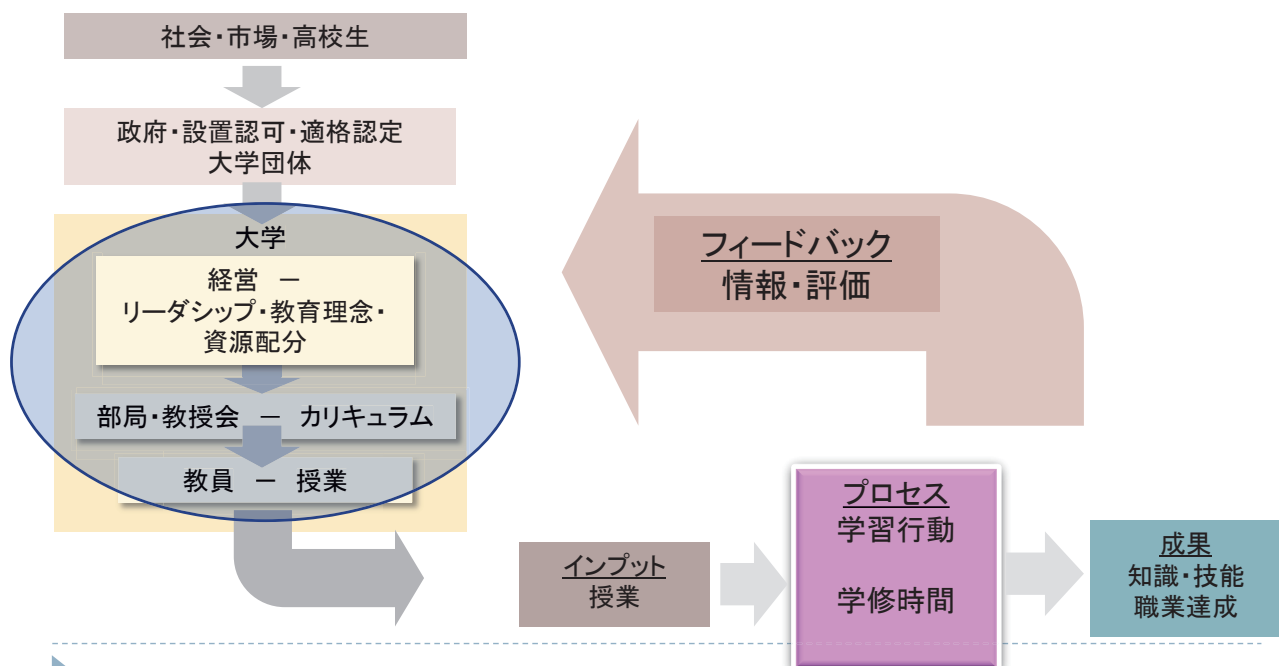
経営問題としての教育改革

- ▶ 大学にとっての教育改革
 - ▶ これまで — 政策対応、上からの改革
 - ▶ これから
 - ▶ 情報開示の要求
 - ▶ 客観的にみて、魅力のある教育
- ▶ 大学の選択
 - ▶ どれだけコストをかけて
 - ▶ 授業料
 - ▶ 何を実現するのか
 - ▶ 教育理念、実績
- ▶ 基本的な指標としての学習時間

▶ 29

改革の軸 — フィードバック

- ▶ 大学、教授会、学科、教員へのフィードバック
- ▶ 情報の共有による戦略の明確化、意欲の喚起



▶ 30

結論

- ▶ 学修時間の増加に決定的な方法はない
 - ▶ 教職員の意識、組織、経営パターン
- ▶ 社会的な環境もすぐには変わらない
 - ▶ 企業 — 不明確な採用基準、一括採用、年功賃金
 - ▶ 偏差値体制
- ▶ しかし変化は起こっている
 - ▶ 大学は先を見て行動せざるを得ない
 - ▶ 組織としての大学は保守的
 - ▶ その中でどのように、変革を導入するか

▶ 31



ご意見・ご質問をどうぞ

学修時間の増加に向けた本学の取り組み ～パネルディスカッションに先立ち～

2018（平成30）年12月15日

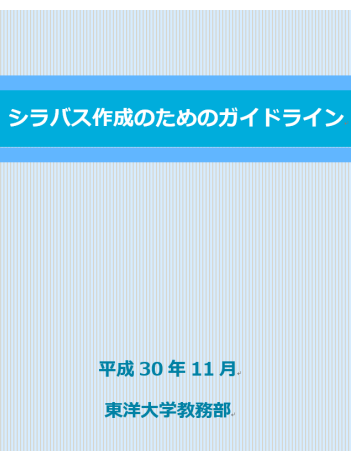
副学長（教務部長・就職キャリア推進委員長・教職センター長）

高橋 豊美

東洋大学の全学的な取り組みの事例紹介

その1：シラバス点検

■シラバス作成のためのガイドライン（13学部50学科にて準用）



①講義の目的・内容	○教育課程における当該科目の位置づけを踏まえ、授業をとおして学生が何を学ぶことができるかを、 <u>概括的に</u> わかりやすく示してください。 ○特に、ディプロマ・ポリシーが掲げる資質・能力との関連も示すことが望ましいです。 ○卒業後の進路等において <u>実務上の能力の伸長</u> に資する内容を含む場合は、その内容に言及してください。
②学修到達目標	○身につけられる知識、技能、態度、表現等を <u>具体的に</u> 示してください。 ○観察および評価が可能な目標を設定してください。
③講義スケジュール	○各回の授業について、それぞれの違いがわかるように、内容を具体的に示してください。 ○各回の授業について、事前の準備や事後の振り返りに役立つ内容が望ましいです。 ○課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法（解説を行ってコメントを付けて返却する、等）を記載してください。
④指導方法	○主体的な学修を促す観点から、授業形態（講義・演習・実技等）、授業の進め方の特徴など、授業を受けるにあたって学生が心得ておくべきことを記載してください。
⑤事前・事後学修	○具体的な方法や内容、 <u>目安となる時間数</u> を明示してください。 ○特に、授業時間外の学修等が多く求められる講義、演習は、各回の授業について明示することが望ましいです。
⑥成績評価の方法・基準	○学修到達目標と対応させ、求められる学修成果を学生が意識して振る舞いに取り組めるように、評価項目を分けてください。 ○各項目の達成度がどのような観点と水準で成績評価に反映されるかを示してください。
⑦受講要件	○履修の前提となる条件、授業科目等を示してください。ただし、受講者を極端に制限するような記述は避けてください。
⑧テキスト・参考書	○テキストは授業で使用するもの、参考書は事前・事後学修で学生が自主的に知識を深めるためのもの（いずれも文献、ウェブサイト等）を記載してください。 ○入手・アクセスに必要な情報を併せて示してください（書名／URL、

【ガイドラインで求めていること】

- 講義スケジュールに、各回の事前の準備、事後の振り返りを記載
- 指導方法に、主体的（自律的）学修を促す工夫
- 事前・事後学修に、具体的方法・内容に加えて時間数の目安を記載
- 課題（試験やレポート等）のフィードバック方法を記載

【全学的な点検による標準・高度化】

- 併せて配付する“点検チェックリスト”でガイドラインとの適合性を確認
- 各学部で第三者点検を実施し、標準レベルに満たないものは修正を指示
- 学部長が点検・修正結果を教務部長に報告（点検体制のPDCA）

東洋大学の全学的な取り組みの事例紹介



その2 : ToyoNet-ACE (LMS) を活用した、事前事後の学修の充実

- 音声・動画を含む資料等の提示
- 掲示板で“**授業ログ**”を展開（教員と学生、学生同士のコミュニケーション）
- 小テストの受付開始・終了日時の設定機能を利用した**ペースメイキング**

G&P Grammar & Pronunciation II 担当教員: ○○○○ 2018 秋学期 / 木2

小テスト一覧

タイトル	状態	受付開始日時	受付終了日時
自動採点 12-3 Listening (復習) ※ 受験条件を満たしていません。	受付中 未提出	2018-12-13 12:10	2018-12-18 00:00
ドリル 12-1 Listening (語い)	受付中 未提出	2018-11-29 12:10	2018-12-18 00:00
ドリル 12-4 Reading (語い)	受付中 未提出	2018-12-13 12:10	2019-01-08 00:00
自動採点 12-5 Reading (予習) ※ 受験条件を満たしていません。	受付開始待ち	2018-12-17 08:00	2018-12-20 10:40

		001	002	003
全体				
178	解答数	1	4	40
		2	5	131
		3	8	7
		4	161	0
	解答率	1	2.2%	22.5%
		2	2.8%	73.6%
		3	4.5%	3.9%
		4	90.4%	0.0%
	正答率	90.4%	22.5%	48.9%
AB05				
31	解答数	1	0	11
		2	0	20
		3	2	0
		4	29	0
	解答率	1	0.0%	35.5%
		2	0.0%	64.5%
		3	6.5%	0.0%
		4	93.5%	0.0%
	正答率	93.5%	35.5%	61.3%

○授業前の3日間に取り組む課題を設定

▷ 予備ドリルで合格点に達しないと取り組めないようにして、基本的知識レベルを統一

○授業後の3日間に取り組む課題を設定

▷ 事前課題とまったく同じ課題を設定して学修内容の定着を確認

▷ 応用的な内容の課題を設定して、発展的な学修を促進

○課題の結果を分析し指導案に反映

▷ たとえば、誤答率を分析して、学生の傾向を把握する、誤答率が正答率を上回る事項に焦点を当てた指導案を調整する、などが可能。

東洋大学の全学的な取り組みの事例紹介



その他：

○反転授業の実施 ～情報連携学部（赤羽台キャンパス）～

- ▷ 事前学修において、MOOCsもしくは学内スタジオ収録講座で講義を聴講
- ▷ 授業において、アクティブラーニングを実践

○学修成果測定指標の開発

- ▷ 各学科のディプロマポリシーに即して学修成果を測る指標を策定（2018年12月）
- 測定結果を学生に明示（2021年4月からの実施を検討）

○春セッション・夏セッション（春季・夏季休暇期間）の有効利用

- ▷ 年間をととした学修時間の確保（CAP制の運用の見直し）
 - ・集中型授業の創出
 - ・リメディアル教育や補習授業の実施
 - ・インターンシップ、ボランティア等の実践的内容を含む授業等の配置

附：「在校生アンケート」からみた東洋大学学生の勉強時間

(学部、学年別)

平成 29 年在校生アンケート実施概要

実施期間：平成 29 年 11 月 13 日(月)～平成 29 年 12 月 11 日(月)

実施対象：在学中の学部 1～3 年生

回答率一覧

(学部別)

学部名	学生数	回答者数	回答率
文学部	3,382	698	20.6%
経済学部	2,527	721	28.5%
経営学部	2,583	347	13.4%
法学部	2,064	426	20.6%
社会学部	3,016	1,028	34.1%
理工学部	2,553	1,463	57.3%
国際地域学部	1,112	232	20.9%
生命科学部	693	324	46.8%
ライフデザイン学部	1,784	613	34.4%
総合情報学部	875	776	88.7%
食環境科学部	685	239	34.9%
国際学部	399	165	41.4%
国際観光学部	388	214	55.2%
情報連携学部	426	151	35.4%

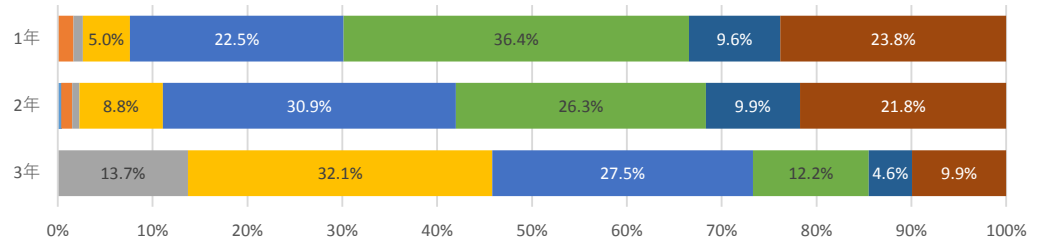
(学年別)

学年	回答率
学部1年生	40.8%
学部2年生	32.8%
学部3年生	24.4%

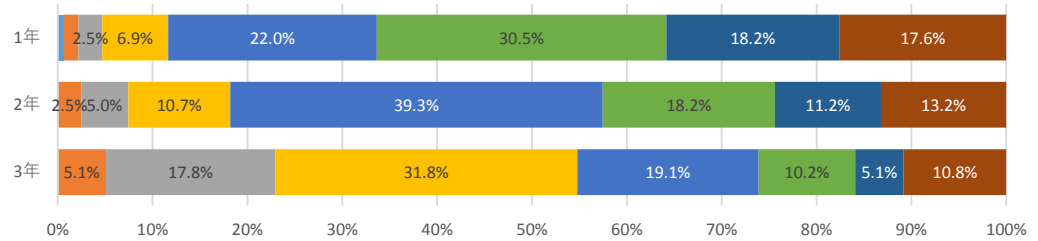
授業など（実験・実習を含む）への出席（典型的な一週間の平均的な生活時間）

■0時間 ■5～1時間 ■10～6時間 ■15～11時間 ■20～16時間 ■25～21時間 ■30～26時間 ■31時間～

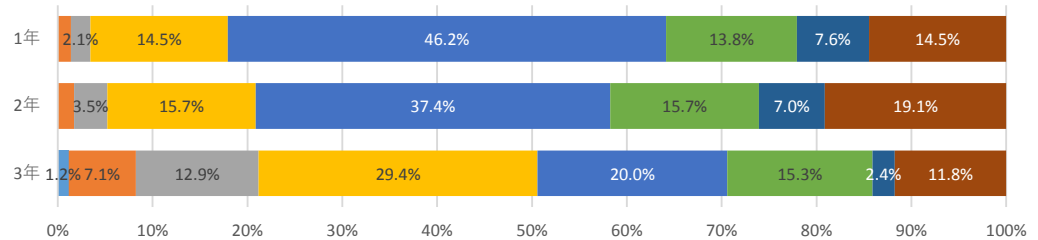
文 学 部



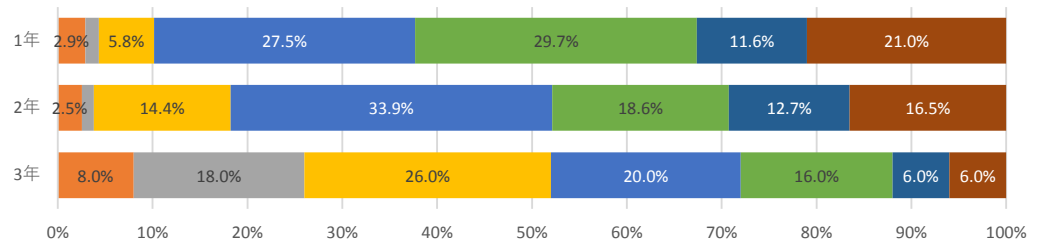
経 済 学 部



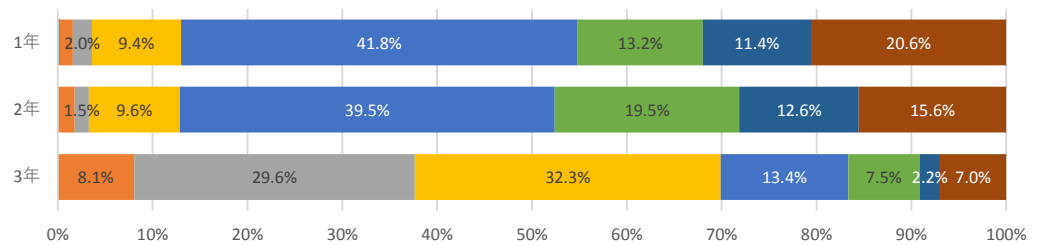
経 営 学 部



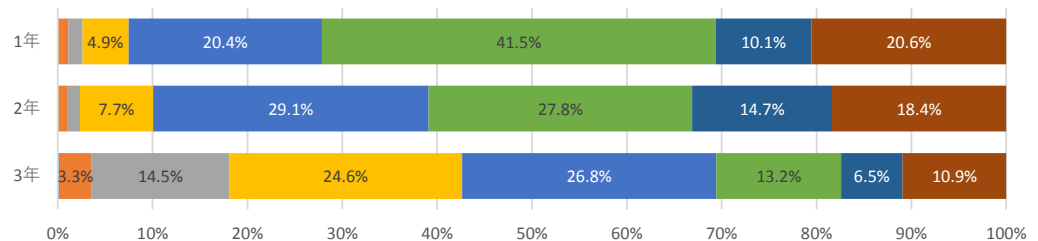
法 学 部



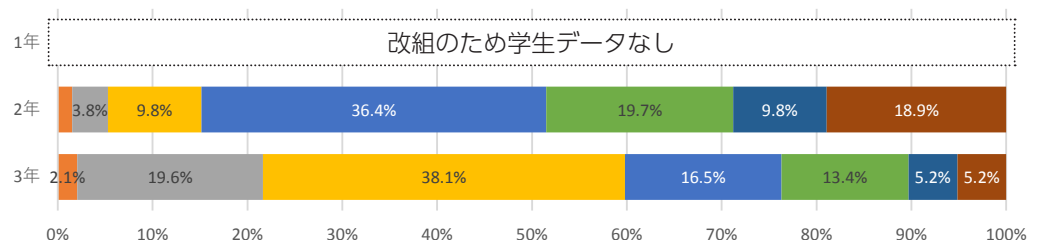
社 会 学 部



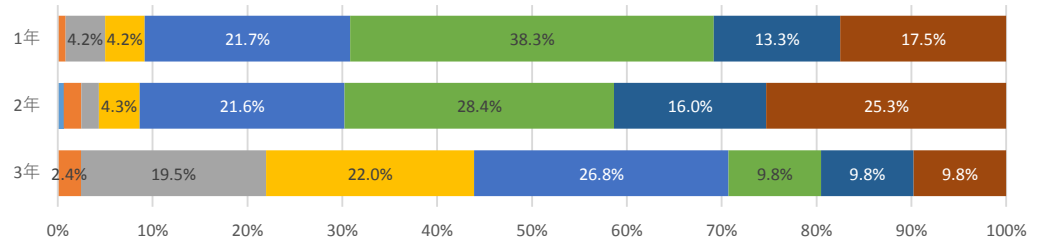
理 工 学 部



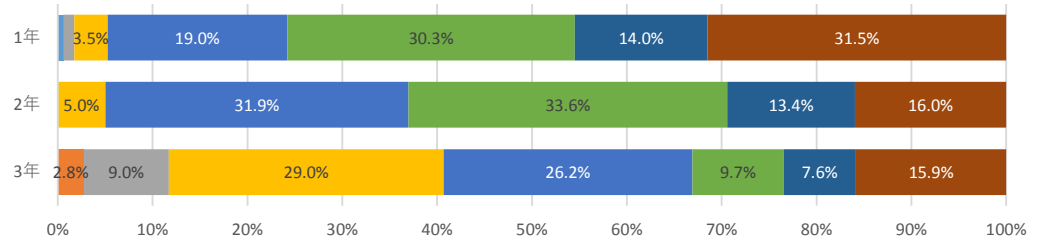
国際地域学部



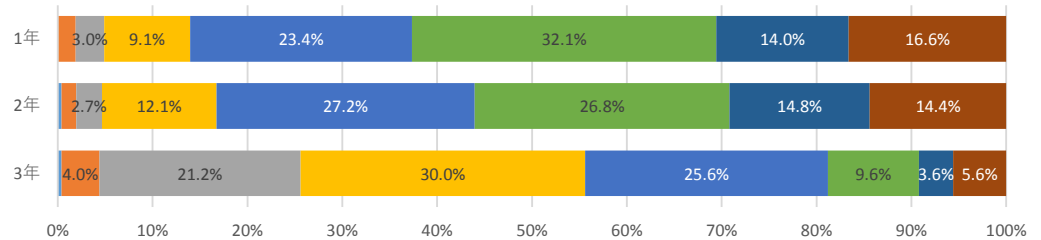
生命科学部



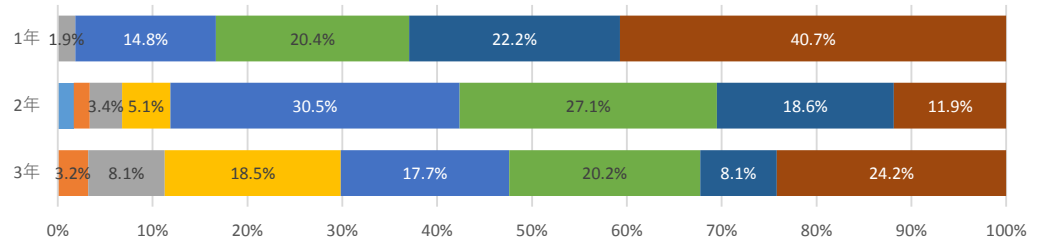
ライフデザイン学部



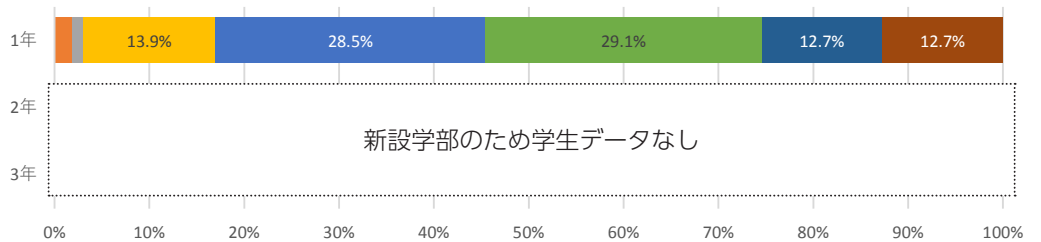
総合情報学部



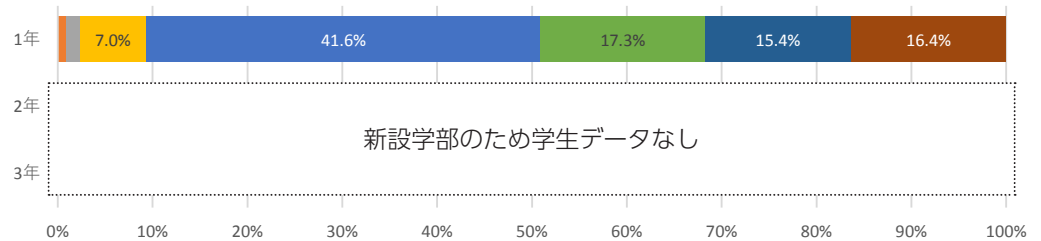
食環境科学部



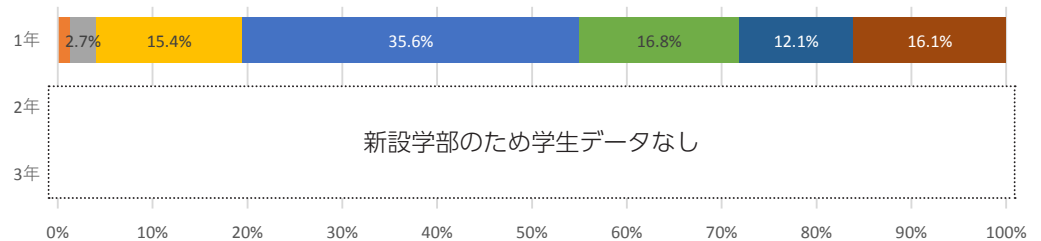
国際学部



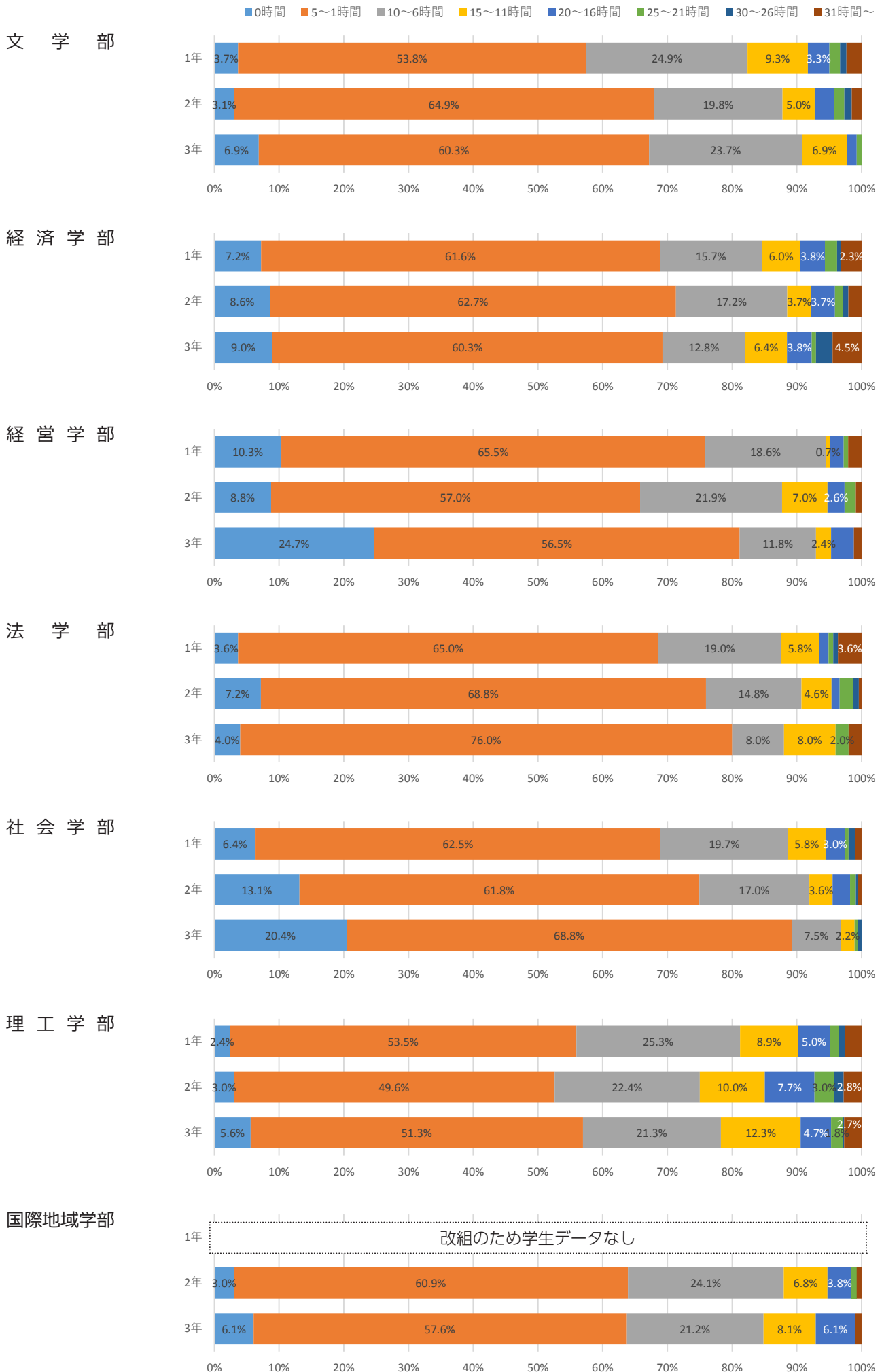
国際観光学部



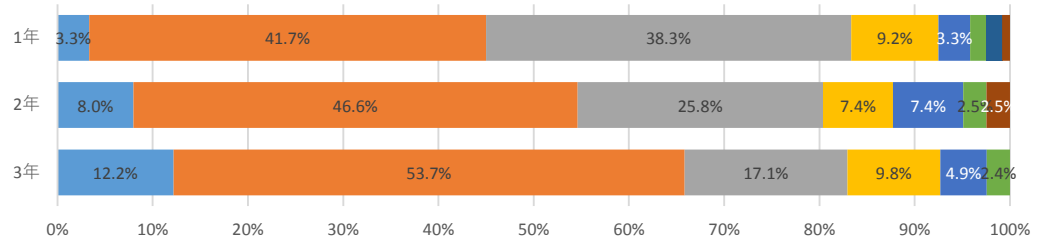
情報連携学部



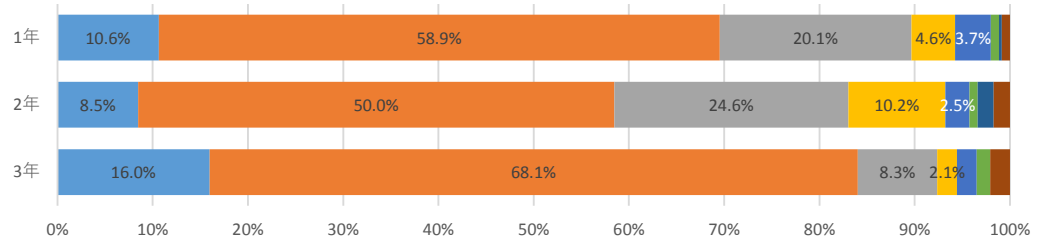
授業の予習・復習や課題をする（典型的な一週間の平均的な生活時間）



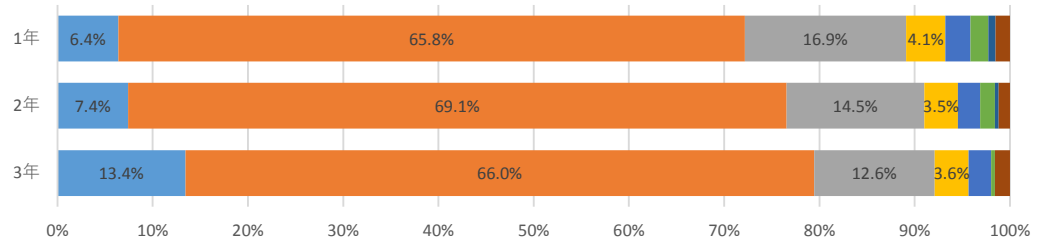
生 命 科 学 部



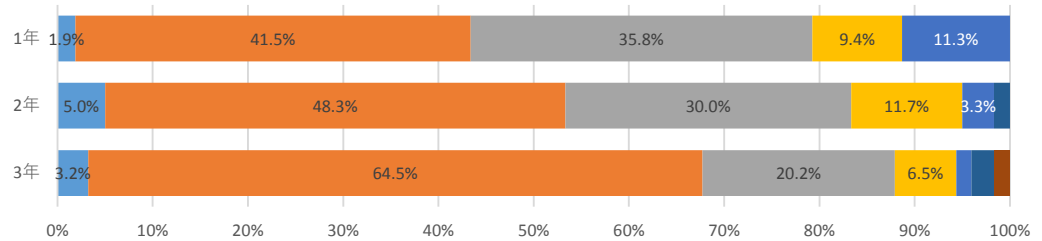
ライフデザイン学部



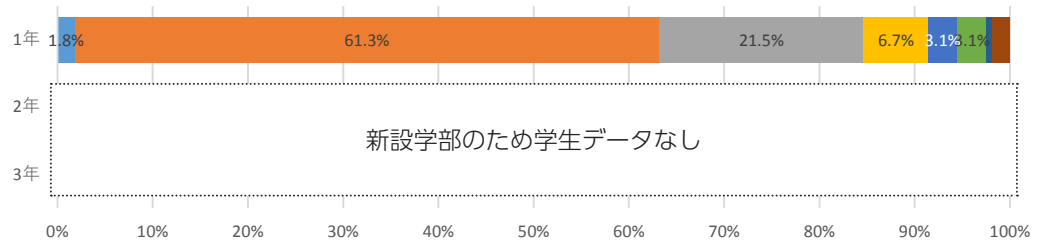
総合情報学部



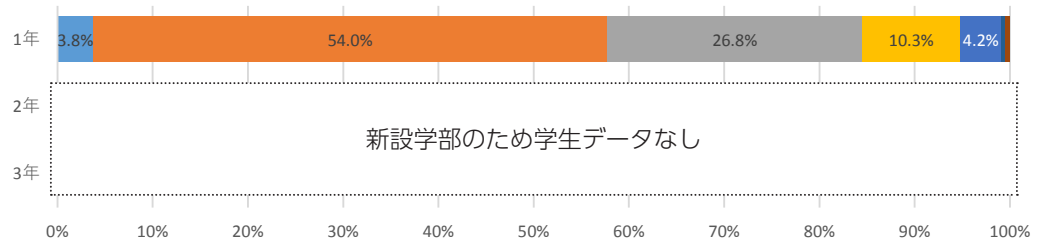
食環境科学部



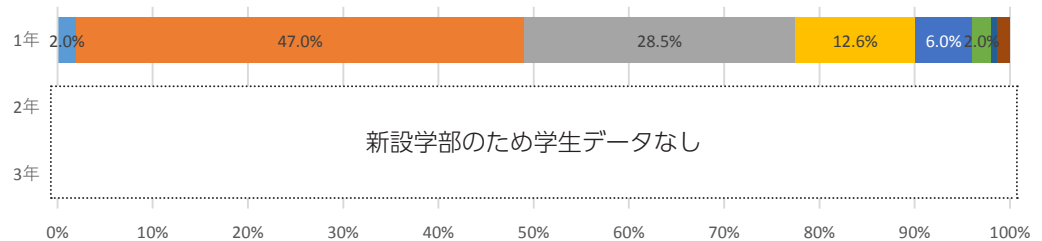
国 際 学 部



国際観光学部



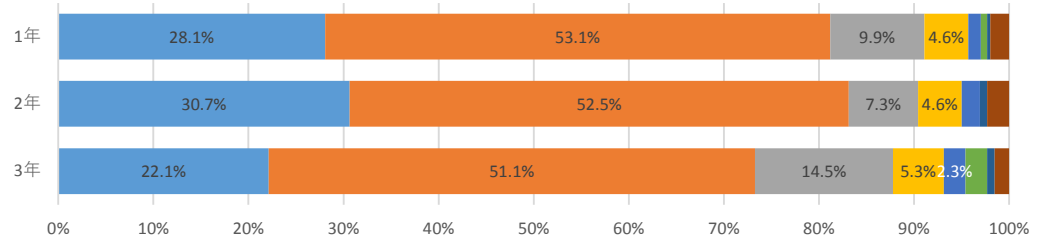
情報連携学部



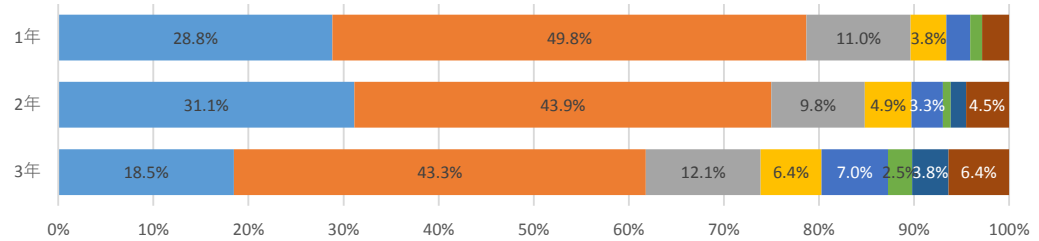
大学の授業と関係ない自主的な学習（典型的な一週間の平均的な生活時間）

■0時間 ■5～1時間 ■10～6時間 ■15～11時間 ■20～16時間 ■25～21時間 ■30～26時間 ■31時間～

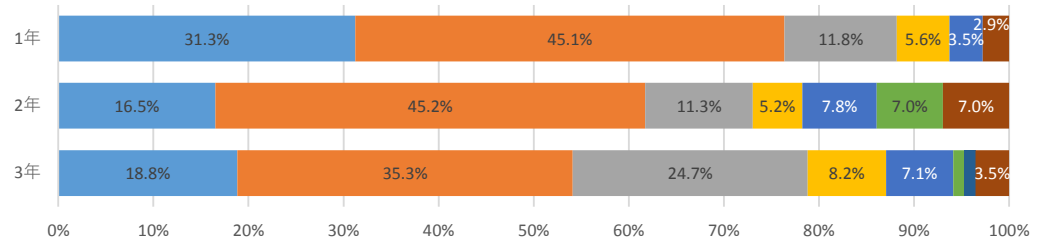
文 学 部



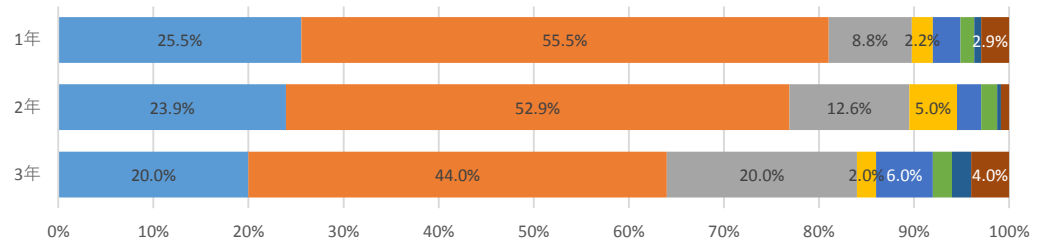
経 済 学 部



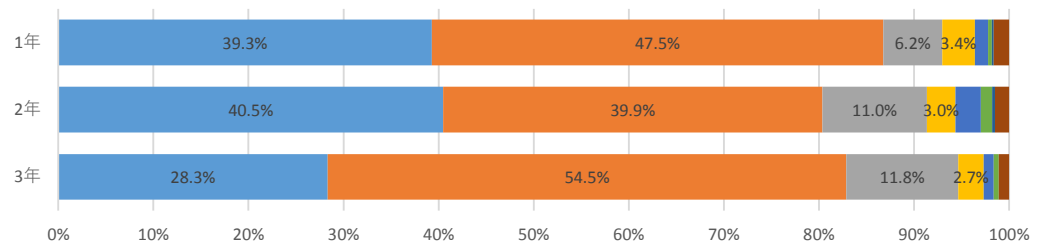
経 営 学 部



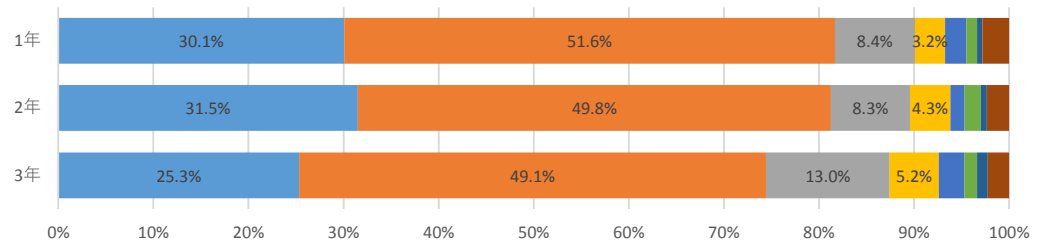
法 学 部



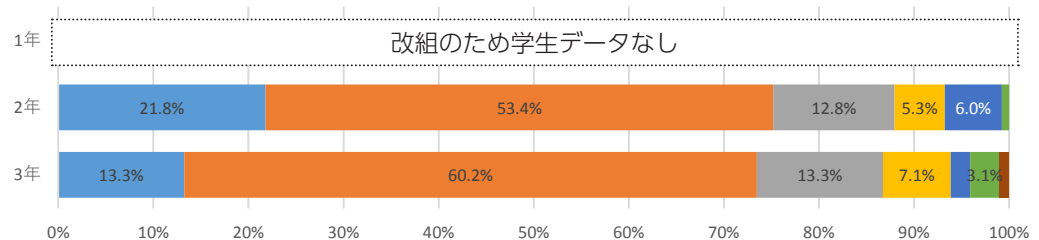
社 会 学 部



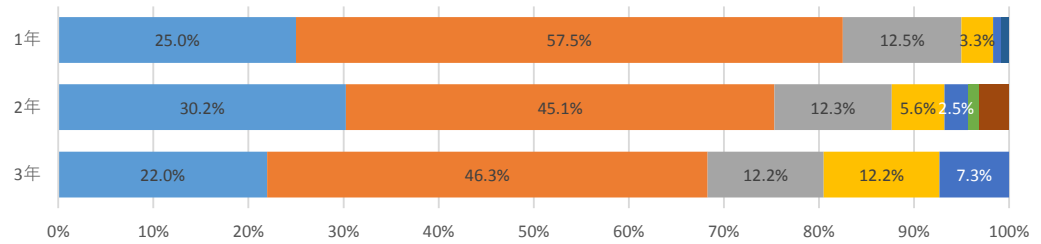
理 工 学 部



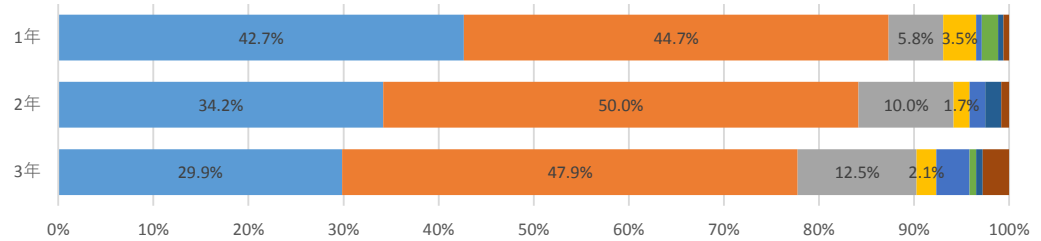
国際地域学部



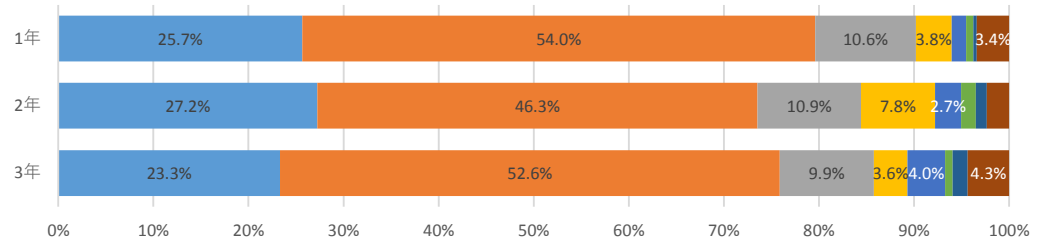
生 命 科 学 部



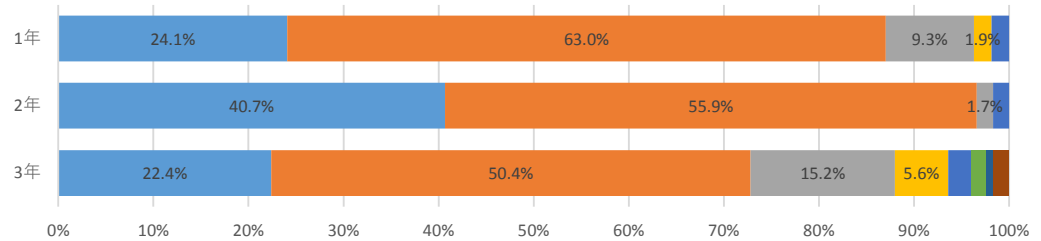
ライフデザイン学部



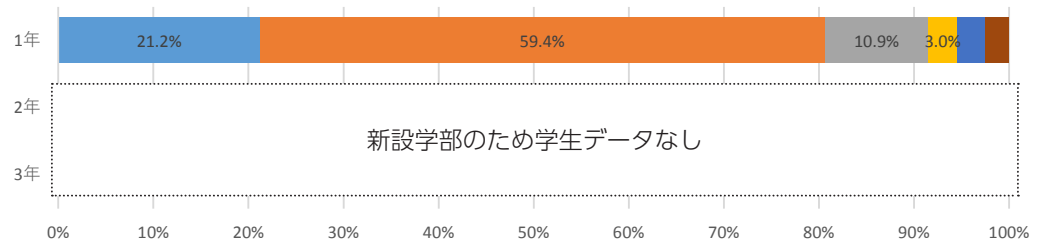
総合情報学部



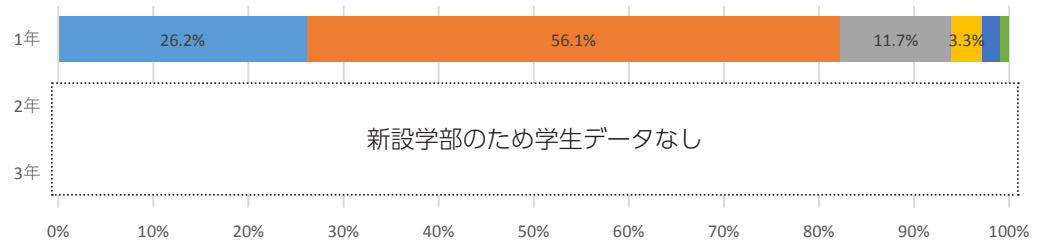
食環境科学部



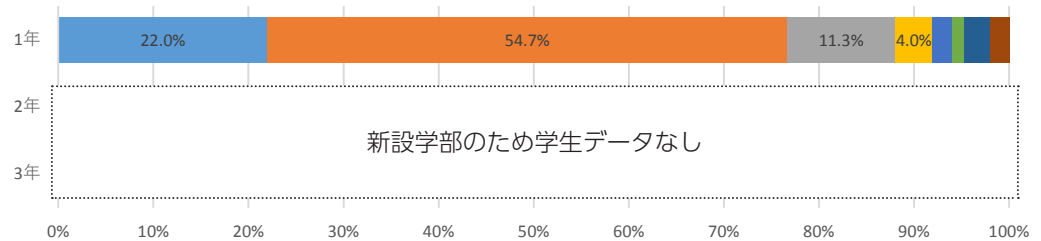
国 際 学 部



国際観光学部

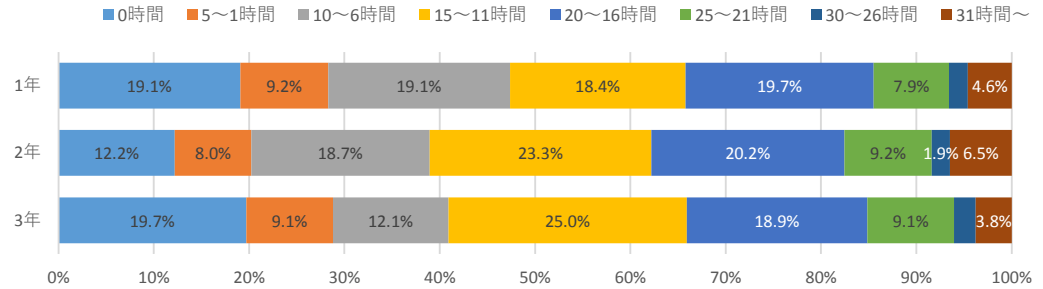


情報連携学部

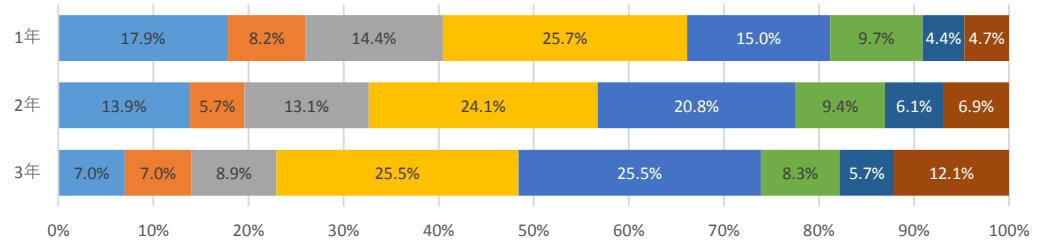


アルバイト（典型的な一週間の平均的な生活時間）

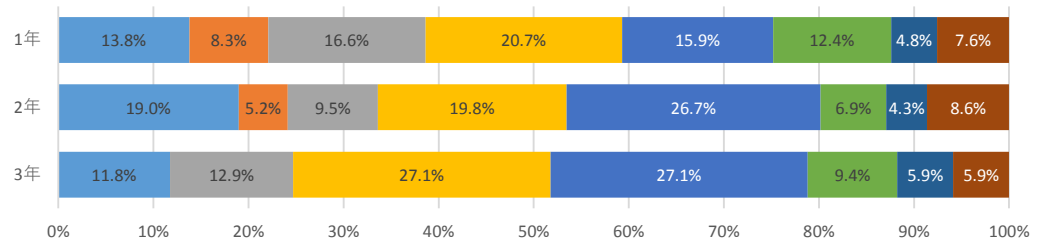
文 学 部



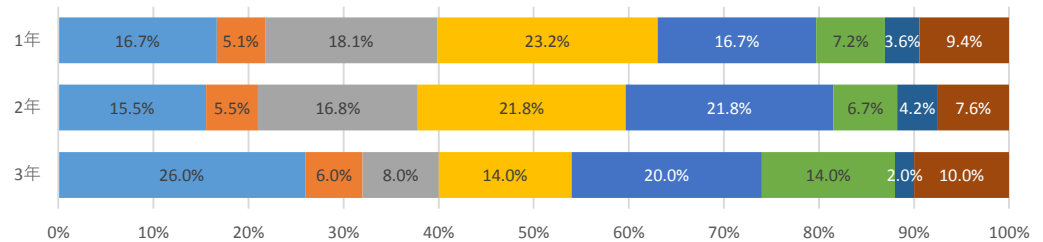
経 済 学 部



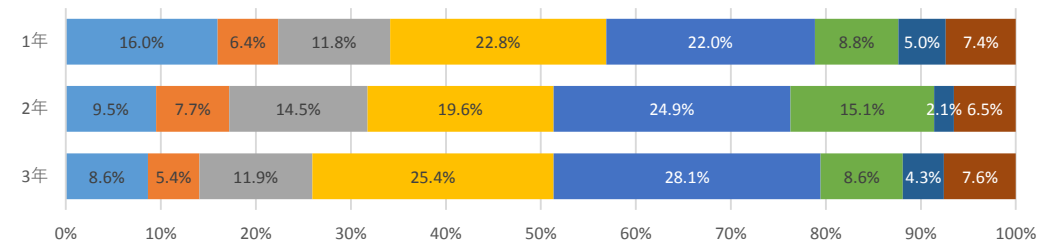
経 営 学 部



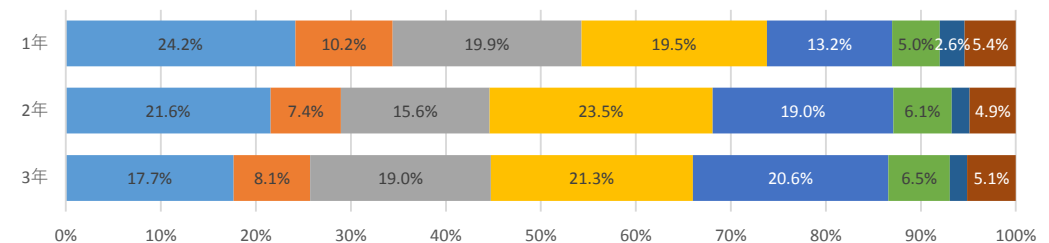
法 学 部



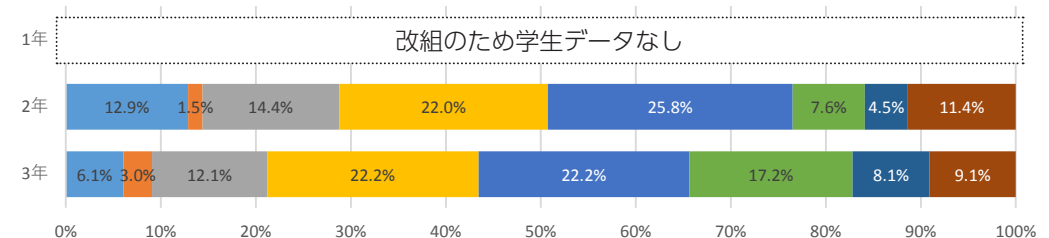
社 会 学 部



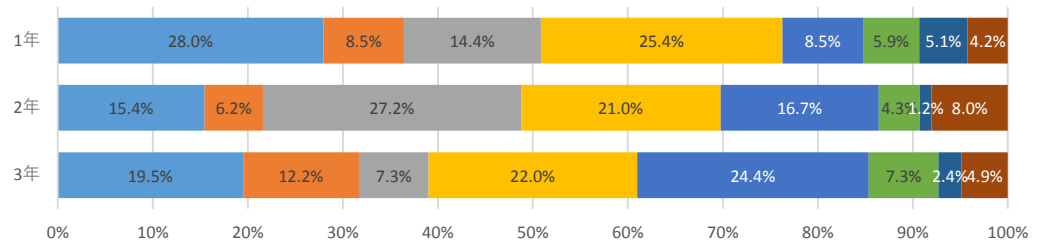
理 工 学 部



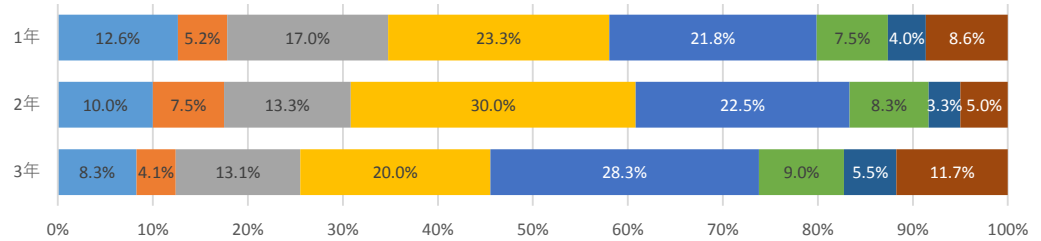
国際地域学部



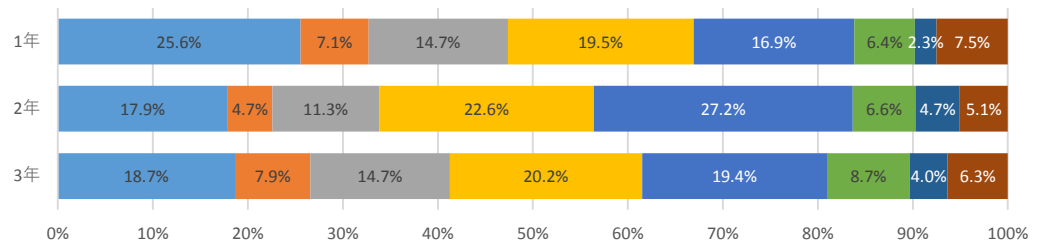
生 命 科 学 部



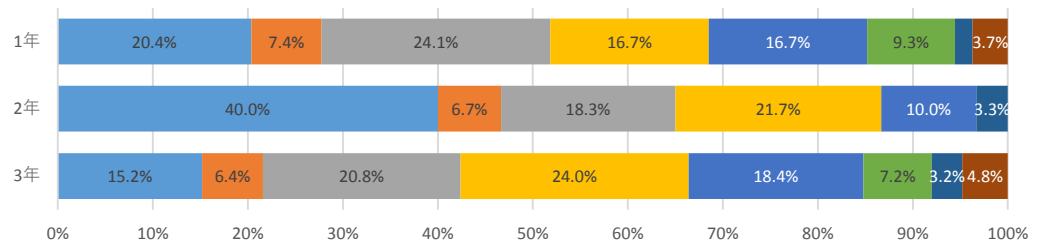
ライフデザイン学部



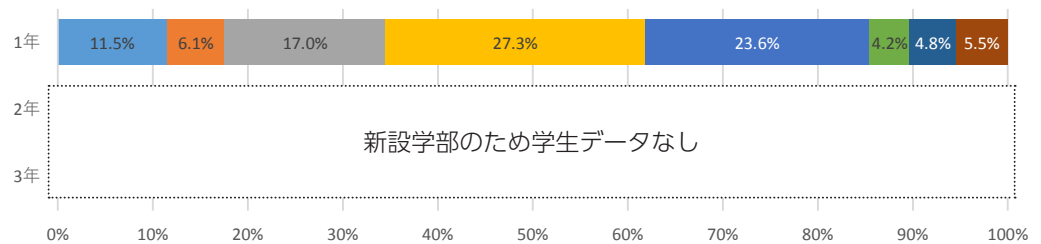
総合情報学部



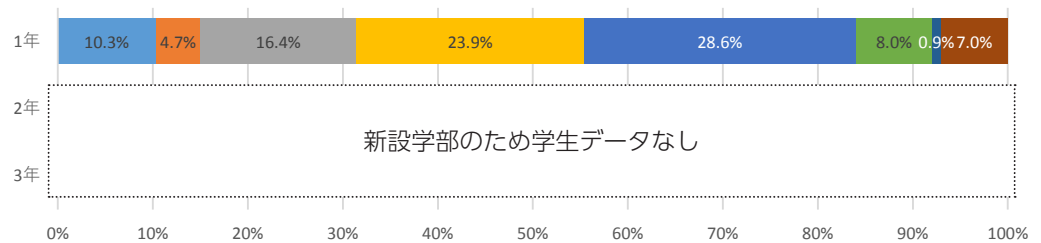
食環境科学部



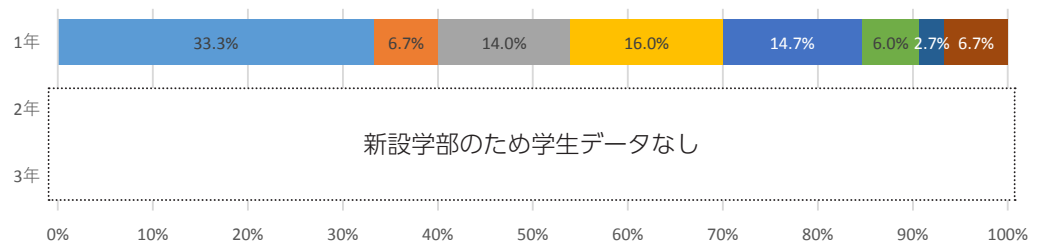
国 際 学 部



国際観光学部



情報連携学部



● IR 室運営委員会委員

竹村 牧男 委員長(IR 室長・学長)

高橋 豊美(教務部長・副学長)

中原 美恵(学生部長・副学長)

松原 聡(副学長)

北脇 秀敏(副学長)

劉 文君(IR 室教授)

林 邦男(学長室長兼大学評価支援室長)

高橋 清隆(国際部長)

● IR 室事務担当(学長室学長事務課)

田中 明紀

新山 文洋

阿部 佑

石川 瑛士

平成30 年度 東洋大学IR シンポジウム

学生の自律的な学修時間をどう増やすか 報告書

発行 東洋大学IR 室

発刊 2019 年 3 月